
薔薇獄少女

亞麻音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇獄少女

【NZコード】

N4957X

【作者名】

亜麻音

【あらすじ】

突如歌舞伎町に現れた連沢新羅奥平翠羽奥平蒼琉とある事件をきっかけに、万事屋メンバーは彼女等が真選組に所属していると知る。

だが彼女等は…。

“プロローグ”

外は、とてもどんよりとした天氣
灰色の雲は、
手を伸ばせば触れられそうなくらいの厚い雲

ハツ……ハツ……

なんで……？

こんな……。

どうして……？

ある“者”は血に染められた屍…屍屍屍…

屍の海の真ん中で佇む

辺りを見回しても、何処を見ても、屍の海は続く…。

何が…あつたの…？

皆… どうし…て動か…ないの？

ガクツと膝から崩れ落ち
これは夢じゃないの?と
頭を抱える

誰が… い…んなことを

酷す……あの

ビハビ…… 私だけが…… 残つてゐるの?

殺…… し…… たい。

色々な喜怒哀楽の感情が頭のなかを廻る

えつ

あれ…… ?

なんで喜・楽?

私、なんで喜んでるの?
なんで楽しんでるの?

こんなに……憎くて憎くて
今すぐ殺したいくらい……
憎いはず……なのに……?

自分の……中で、この状況をこの現実（今）を
愉しんで……る自分が居るかのよつ

あつ…そつかこうこうのを

“狂つてる”って
いつのか

そつか
私狂つてるんだ

次第に口はどんどん横に
開いていき…
ついにはハハハ…ハハ…と笑いだす

するとさつきまで

いなかつたはずの前方に人影が見えた。
尻を我が物顔で踏み付けながらこちらに近づいて来るのが見える

そこには…
女が一人…

そして

異様なほどの笑顔を向ける

アナタハ

ワタシ...と回^ジ。

同^じ?

ケイヤク...シマシヨウ...ワタシト...

契約?

ソウ...ソウスレバ

アナタハ。

“プロフィール”（前書き）

少し修正しました。

“プロフィール”

（「プロフィール」）
（オリキャラ）と
（ローゼンマイデン）

ローゼンマイデンの説明は本文にて出て来ます。

連沢 新羅

（つれざわしんら）

身長：164・7？

年齢：19歳

特徴：肩より約6？ほど伸ばしたグレー色のストレートヘア。目の色は黒どく普通。真選組隊長服を着用しているが、ズボンではなく、太もものちょい上までの黒いスカートに黒のピンヒールブーツ。

腰には刀剣が刺さっている

奥平翠羽

（おくひらすいりう）

身長：161・8？

年齢：16歳

特徴：髪は

腰まで伸ばした

茶色のクルクルツインテール。右目が碧色。左目が赤のオッドアイ。
新羅と同じ服装。腰には刀剣が刺さっている

奥平蒼琉

(おくひらそりゅ)

身長：160cm

年齢：16歳

特徴：青色のショートヘアで右目が赤色。左目が碧色のオッドアイ。
浴衣を少し改造し動きやすいように工夫している。

黒いピンヒールブーツ

クナイをいくつか持ち歩いている。

浴衣の色は、青と濃い紫を掛け合わせたもの。

翠羽の双子の妹。

真選組とは全くの無関係。

女ってたまに向考えてるか分からなくなる（前書き）

グダグダのガダツガダ小説になるかもですが
どうぞ
お手柔らかに
お願いします
では
オープンッ！（^_^）！

女ってたまに何考てるか分からなくなる

*

時は秋

夏の暑中が終わり、
少し肌寒くなつてきただ頃合い、多くの人々が季節の
変わり目を感じ衣更えの支度をしている。

紅葉で色鮮やかに染まる
木々達を、よそに
今日も歌舞伎町は、
人・天人で溢れ返つてゐる

いつもと変わらぬ平凡な生活が一変するなんて
誰も予想つかないまま

「あー 疲れるぜ… なんで初っ端から定春の散歩？？ てか何この
シチュエーション…！」

主人公としてありえねーだろつ！ 普通、主人公といえば海賊船に乗
つて「海賊王に俺はなるつ…！」とか、

「真実はいつも一おつ…！」とか「かーめーはーめ…」

「「は」なんて言わせねえよ…！」

てかなんで他のアニメの名台詞言つてんだよつ…！」

見た目はぱつとしないがツツコミが取り柄の新八。外が寒いせい
か口からは
白い息が出ている

「やつねっ！こんなアニメ出方考えるほうが負けネ。他のアニメの台詞言いつばひこのアニメは甘くないアル

「まだまだだネ」。

「お前も他のアニメ引っ張ってきてんじゃねえかよー。」

そんな会話を聞きながら、のんきにあべびをする定春はの「」歩いている。

すると、

「ワンワンワン…ワン…」

「…」なんだ定春、
イイメス犬でも見つけたのかつ…」

定春の鳴く方向に銀時は田を向ける…

「…？」

「…？つて…！…え…」

「つま……とか」

一度見する銀時。

「どつどつしたんですか！銀さんつ…」

「天パつ！何があつたアルか！」

銀時の額に汗が垂れる

「あれ…はまつま…さかの

今日つ…て…

ジャンプの発売日じやねえかよおおおーー！」

「そつちかよつ…！」

新ハと神楽はがくつとずつこける。
「いきなりシリアルスマード突入！かと思つたらそういうことかよ。
何紛らわしい行動とつてんだよ！
てか良くこつからジャンプの表紙みえるよなつー！此処から約25
？はあるぞー！それと定春急に止まんな。お前が止まると後ろの人
に迷惑かかんだよ！」

振り返ると、約15人弱の人等が冷ややかな目でこちらを見ている

とりあえず頭を何度も下げて謝り、道を譲つた

あつー言い忘れてた！新ハがツツ「ノリ」を言い終えるとゼーハアゼー
ハアと
息をあげた にしても

よく一つも嘘はないでツッこむ。それはツッコみと眼鏡の長い付き合このせいか。（作者あああつ？）

「新ハイーー！お前は眼鏡＝新ハだがやれば出来る奴だと思つてたぞー！だからおめえーらは、定春の散歩を続けてろーーー！」「それ褒めてんのか

けなされたんのかわからんねえんだけどーって何自分だけ楽しようとしてえんだよ僕だつてお通ちゃんのNEWシングル買い……」「駄眼鏡少し黙るコロシーいつまでも乳臭いコト語つ点じやねーコ。

だからお前はいつまでたつても新ハなんだよーなんだよ「ハ」つて！

私「ハ」よつ「一」派ネ

「神楽ちゃん…さつきから言つてるけど他のアニメ引っ張り出すの辞めにしよ。てか僕が新一に適うとでも思つてるの？」「思つ訳ねえーだろーぶつ殺すぞー！」

「神楽ちゃん…毒舌」

「まつあんな甘党ヤロー

ほつといてさつと帰るあるコ。あつ帰つたら「渡る世間は鬼しかいねえコノヤローー」見なくちやこけない「アル！ 定春早く帰ろー！」「わんつー！」

すると神楽は定春にちよーんと乗りスタスタと行ってしまった。

「…駄目だ。わざわざから色々なテレビのタイトルやなんやかんや出しあがてる…。

泉ピ子うすみません…」

新八はこちりに向かって深く頭を下げる。

「さて僕も行こう。

あれ？」

前進した身体を数歩後ろに戻す
新八は少し疑問を抱く。

「銀さんの入ったコンビニ毎日毎日客が多いのに今日はやけに入らないな…てか人ぼぼゼ…」

「新八…！間違った駄眼鏡…！…早くするアルヨ！」
ブンブン手を振る神楽

「…………」

「僕の名前は新八じゃわ――――！」 新八は大声でそう発しながら神楽達の元へ走っていく。新八の声は雲一つのない晴天の空に余韻を残し

そのまま静かに消えていった

〃 〃 〃 〃 〃

新八が疑問を抱いてたなか銀時は満面の微笑みでコンビニの中にはいる。

「ジャンプージャンプっと…いい年こいてジャンプなんて…とか
言つてる奴

あいつらぜつてえジャンプの良さわかつちやこねえー「少年ジャンプ」とか言つちやつてるけど実際少年以上におじさん向けもあるからね。特に「TO LOVEる」とか

あれ何歳でも読んでも平氣なやつだよ。9だの13だの年齢制限やつてるから餓鬼がいつちやつてる世界に、Let's perkyしたくなるんだよ。あんなのFUTUREOPENにしどきや餓鬼が卑猥なコト考えずに平和に暮らしていけんだよ。まつ銀さんは外見がおっさんでも心が少年だから少年! ジャンプ読んでも

大丈夫だけどねー!」

と独り言を言いながら雑誌等に田もくれずジャンプ、SOG、マガジンなどと

ずらりと並んでる前にびしつと立つ。

「ジャンプの今田の表紙はトコ?...か。悪くねえ」
ジャンプに手を伸ばす

カチヤつ…

何かが頭の後に突き付けられる。

女ってたまに向者べつるか分からなくなる（後書き）

新） ???

（神）なんだよぱつつかん
何キレてるアルか？

銀）お妙にまた
ダークマター
食べさせられたんだと
その副作用で作者に
八つ当たりしようとしている最中、じじこせーーー。

新）変な言い掛けりは
やめひよーーー

「花よつ園」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（前書き）

今回のサブタイと本文全然関係ありません。

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？

「おーおー多串くんか。

何君もジャンプ買いにきたの？

あつ！君はマガジン派だつたか。駄目だなあ君はまだまだアマチュアだ。てかマヨラーっていう存在だけでもうアマチュアだよね。いやアマチュア以下だよねもうへタレヤローだよね！つーか鬼の副長と恐れられてる人がマヨラー！？

まるで、夜にラーメンを食べる人略してマヨラーの間違いじゃなくて？

片手にジャンプを持ち、手の空いてるもう片方の手で耳をほじくりながら振り返る。

「俺はジャンプでもマガジン派でもない。」

「盗み屋派だ…！」

そこには銀時に拳銃を向ける男が一人いた。「えつ…」尋常じゃない汗がダラダラと頬をつたう辺りを見ると、コンビニの店員4人、高校生くらいの女子3人、スーツ姿の男2人、お婆さん1人、に黒づくめの男たちが拳銃を突き付け座らせているそれに

タバコを加えグラサンを

かけたおじさん

金のなさそうなそのおじさんはホームレス生活でもしていそうな…

いやしてこるひとがそこにはいた

見た目どおりまるで駄目なおっさん……略してマダ…ってただの長谷川さんじゃねえかよっ…!

なーにやつてんだあの

おっさん…!…てか何ラフにパンツ一丁で拳銃突き付けられてんだよ。何顔赤らしめてんの!

Mだよあの人Mだよ

声に出したいが、この状況で言つわけにもいがず

心の奥深くでツツ「む

ツツコむツツコむ…!

「おい何してる さつさとそこに座れ」

銃を突き付けられながら人質が集う場所に座らせられる 隅とでもビクビク怯えている 隣のパンーのヤローを抜いてわ…。

(ツチなんだつてんだよーなんでこんな展開つー初っ端から定春の散歩させられるわ

変な黒づくめのやつらに銃向けられてフラグは立つわ主人公としてかつこいいといふの何もみせてねえーじゃねえかよー)

「あつ銀さんじゃん。こんなところで何してんの?」

…

「何してんのつてどう考へても銃突き付けられて今にも頭ぶち抜かれそうな感じだろ見てわかんねえーのかバツキヤロー！ てか長谷川さん何その格好？ なんでパンー？」

黒づくめの男たちに聞かれないよう

コソコソ話で長谷川さんに問う

「いやあーネクロゴンド

からここまで帰つてくるのに7日かかったんだけどパンツびしょ濡れでさあ…それに帰つてくる途中鮫の大群に襲われてパンツ破かれちゃつたしコンビニで仮のやつ買おうと思つてここ寄つたんだけど結果こういうハメになつちゃつたんだあ

「あーだからパンツそんなに破けてんだね。まあもつ半分フルチン状態だけどさ…。軀喰われなかつた分

有り難く思つたほうが良いよ。

ホントホント」

見ると色がハゲたトランクス+半分モザイク状態の下半身がそこに
はいた

「まあな後、ネクロゴンドに行つてきたお土産

「まる子も大好きになる

お菓子」略してマダオあるんだけど…食べる？」

「結局お菓子の名前もマダオなんかいつ

「味覚絶品！ ネクロゴンドマミコーダパオ味だけど…」

「味の問題じやねえーんだよ！ 良く見てみろこの状況！ こんな状態で呑気に食つ暇あるなら今頃この重苦しい牢獄から抜け出してるわ？」

てかんな得体の知れない

「食い物食えるわけねえだろー！」

「おいそこ静かにしろつー殺されたいのか」

力チャツカチャ

銀時と長谷川さんに向けて黒づくめの男達が一斉に銃を向ける

「ちよつ…ちよつと

待つて下さいよ先輩方ー俺達撃つても何も得する事ないですつて？あつ！でも

隣の人（長谷川さんに）に

撃つたら

ホームレスになつた時の

生き方の知恵など得ること出来ますよ　〃

「ちよつ銀さんつ！！何俺を盾にさせようとしてんの！…そんなどつたらこつちの銀髪の人撃つたほうが得ですよ！撃つた瞬間、コイン出て来たり、アイスフラワー やファイアーフラワーとか出て来て技使えたり、スター出て来たら、スーパーサイヤジンよりも無敵になれますよ　〃

「おいおい長谷川さん！あんた何言つちやつてんの撃たれてコイン出て来るなんて聞いたことないんですけどー何パックンフラワーに喰われて財布？だけじゃなく頭の中のコインまで空っぽになつちやつた？」「そういう銀さんこそ何その頭！塩でも振り掛けたの？だからそんなに白いの？」

あつ！もしかして

アイスフラワーに凍結されちゃつたの？成る程！

どうりで人よりも遙かに

煌めいてると思ったよ！

俺、マジ髪に神がいるかと思つたよ…！」

「何ソレダジャレー寒いよ寒いよ！あんたは、死ぬまで末永く「ダンボールの神様」でも聞いてろー！」

「クッパに炎吹かれて

髪チリチリ+タマ無くなつちまえ」 「……？」

タマ無くなれつてどういうことだああー！俺は、死んでもタマとタマで闘わせられたり、ボックスドライバーに変えられたりするのはもう御免だあー！」

アニメ・原作などを見てた人なら分かると思うが、銀時の股間はリアルワールドではあまり使いどころはない。だが股間をいじるギャグを何度も生み出すことで笑いの神様を挙げるコトが出来た！そう…この銀魂（世界）は“股間”というキーワードで成り立つてい…

「るわけねえーだろー！」 そんなこ汚ねえ汚物なんぞでこの世界が成り立つてゐるわけねえーだろー！！

確かにこのアニメは普通のアニメとは違い、餓鬼には聞かれちゃまずい台詞も多々発してて。視聴者からの苦情の電話で何度も打ち切りの危機にあつたか記憶に残らねえほど山ほどあつた。だが一人でも多くこのアニメを見ていただけるよう汗水垂らして頑張つてた俺達の苦労！そんな汚物」ときにとられてたまる…

亜麻音

「はいはい終了終了ーーー金玉か銀魂かう こか

か知んないけど早く先進めてくれませんか？前の前書きで「オリキヤラ出て来ます！」って

宣言しちゃつたのに、こんなコンビーの中で眠気が覚めるようで覚めないようなゆるい話が終わらないといつまでたつても先進まないんですけどー！さつさとピリオド打つちゃつてくださいよー！」

「ちよつと作者ーあんた何してくれてんの！俺今良いこと言つてたよね？最後シメようとしてたよね？俺やつと主人公としてカッコイイとこ見せりれるふ陰氣…てかそういう空氣だつたよね？」

「私…空氣読めない女なんで！」

「何“きまつた”みたいな感じになつてんの…何も決まってないからね！そういうやつクラスに一人か一人いるよね！俺ああいつ子苦手なんだよねとか周りから言われてる系だよね」

亜麻音

「まあともかくやついう訳だから…。んじや後よろしく！あつ！あと一応忠告しとくけど、くれぐれも撃たれないうこ んじやまたねー」

すると作者は光の速さで飛んでいき、キララと星が一つ光ると、何も見えなくなつた

「あー？何なんだよたくつーあつ！」

長谷川さんいたんだ

「なんでー今までずっと
話してたじやん！」

なんで急に存在消されてんのー！」

「冗談だよ冗談！」

あつー先輩方すみません…大変長くお待たせいたしました…」

バ
アン！

外は晴天、。

中は曇天の状況のなか

曇天の空は雲一つ晴れることもなく激しい雷雨が降り続いていた。

そこに集う者に予想したくもなかつた最悪の光景を見せながら

「花よつ園」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（後書き）

作者がキラッと光りつて所は、ロケット団の奴でも思い浮かべて下さい。

後最後の曇天つてところはコンビニの中のことです。
てかコンビニの中で雨ふらねえし……とか思つてる人はそこはスルー
でお願ひします。

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け（前書き）

今日は銀さん達はでてきません…

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け

「まあだいたいこうこう帰つてこない日はパチンコ行つてゐる日が多いけど、定春の散歩の途中だつたから財布持つてないと思うんだよね。あつたとしてもジャンプ代くらいしか持つてつてない思うんだけど…」

「だつたらコンビニ強盗にでも捕まつてるんじゃないアルか。それかもうコンビニの中で銃で撃たれて死体となつてゐるか。」

小指を鼻の穴にいれほじくりながらそんな冗談のよいで「冗談じやないコトを言つ

なぜなら今さつときコンビニの中で一つの銃声の音が鳴り響いたからだ。

「ハハハつ冗談も対外にしてよ。神楽ちゃん いやだから冗談じやないって！

もしかしたら、みんなの

銀さんマジガチで屍になつてるかもしねりないよ！主人公ご愁傷様つてなつちゃつてるかもよ！

「そういえば…この時間帯つて「渡る世間は鬼しかいねえ」コノヤロ一」の再放送やつてるアル。駄眼鏡

リモコン取るアル！

「だからその駄眼鏡つてやめてくんない？」

「いいからさつさと

リモコンよこせよ。私よりもくにグッズ出でないくせに…。」

「んなつ！…それ氣にしてたのに…！てか今関係なくね？」 そう言
いつつ自分の隣にあつたりモコンを神楽に手渡す。神楽はリモコン
の電源を入れると「渡る～渡る～」と意味のわからない歌を唄いな
がら、チャンネルを回す

「おーちょうど
ぴつたしネ」

オープニング
／てれれれれれれん

てれん てれれれれれれ… てれ… 「ニュース E D O ~

先程こちらに入つてきた情報をお伝えします…。中継が繋がつて
いるようです。

「なんだよつ！オープニング聞けないじゃないかアル」

…では現場にいる

結野アナ！結野アナ！

…はい現場の結野です。先程こちらのコンビニで
強盗事件が起こりました。そのあとたまたまこの
コンビニに居合わせていた客を人質に捕つたようです犯人は
「人質を返してほしくば、金を1億用意しろ」との請求を求めてき
ました。

数々の

警察達が説得を求めても一向に動きを見せず

手の施しようがなく、真選組への出動命令も今さつき発動された所

です。

一体この事件はどうなのでしょうか？

そして人質は無事生きてあのコンビニから出てこられるのでしょうか？

また新しい情報が入りましたら、お伝えします。

以上 こちらの中継でした：

「はい結野アナ！ありがとうございました。

くれぐれも気をつけて下さい。え、それではまた新しい情報が入りまし
たらお伝えいたします」

「コースEDOが終わると「だつてそんなこと言つたつてしちゃうが
ないじやないか」とナリが発していた。

だがそんな名言を発しているナリにも田もくれず、向かい側に座
つている、

新ハと顔を見合させ、しばし時間が経つた

そして新ハは

ハツ！と思ひだす

「まさか定春…。あの時コンビニに向かつて鳴いてたのはジャン
プの発売日のこと教えてたわけじゃなく…あそこに犯人がいるぞ
つて知らせようとしてたんじや…」

「じゃあ…銀ちゃんは今頃…。」

「……………。」

ダツダツダツダツダツ

バタンツ！

鍵を閉め忘れたことも気にせず

ただ…

“田指す場所”へと走る

(銀さん…今助けに…)

(銀ちゃん…今助けに…)

二人の思いが重なった今

救いの神は

微笑むか

それとも
?

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け（後書き）

オリキヤラいつ出て來るのか自分でもわからない…。

日本のお仕事カードで、ホリキャラクターが書かれています。

日本のお仕事カードで、ホリキャラクターが書かれています。

古いのハッシュキーでマスクして必要なやつや実は幸運の持つサ

（エーペンハーディング）

“バーン”

一つの銃声が鳴る

銀時と長谷川さんはそれぞれ死を覚悟していた。目を開ければそこには見たこともないエンジェル達が俺を連れてあの世にいくのではないかとそんなことを思いながら…。

だが心のどこかでは

（銀さんが撃たれる）

（長谷川さんが撃たれる）

と反面思っていたかも
しない

両手で体を軽く摩り
撃たれた場所を探す

……あれ？

ゆっくりと目を開け自分の 体に視線を向ける。
そして瞬きを2、3回する。両者一人共

撃たれてなどいなかつた 血が一滴も垂れておらず
痛みつすら一つもなく…

彼等は、生きていた喜びを言葉や身体で表現するのではなく
ハアーッ…と息を垂らして喜びを表現した

だが安心している暇など
ない

だつたらわつきの

銃声は一体…？

たまたま

弾が入ってなかつただけか？

それとも 外れただけ？

否、ターゲットを変えたのか？

だつたら誰に…？

イッイヤ… イヤア…

「…！」声がした方に体を向ける…

そこには…

高校生くらいの女性がもう一人の高校生に体を揺らされていた

見るかぎりその女は

ただ体を揺らされ続けているだけで微動だにしない…

ピクリとも動かず…

身体を激しく揺らしながら大声をあげ呼び続けている声にも応答せず

「ちょっと…先輩方…？なつ何して…」

「あーあ可哀相にな…お前等が騒ぎもしなかつたらその女は身代わりにならずに済んだのによ…。全てはあんたらの失態が招いた結果だよ…。」

今だに銃口からは灰色の煙が薄々と出でている
女を撃つた黒づくめの男は銃口に向けて、フツと息を吹き込むと灰色の煙は、サーッと静かに消えていった

「サナ…サナ…起きてよ死んじやいやだ…！」

「サナ…といつ名は多分撃たれた少女の名前だら…。
少女の友達は必死にその娘の名前を呼び続ける…。
無駄だ…。と

分かつていながらもその娘は少しの『軌跡』を信じながら…

「…たらつ

だつたらなんで…なんで俺達を撃たなかつた…じつして罪のない人間を撃つ必要がある！」

銀時は、黒づくめの男達に鋭い目をやる

「ああつ？お前自分が撃たれなかつただけ有り難さを嘗め。変わりにその女が身代わりになつた…。ただそれだけだ…。」黒づくめの男は、顔は少し微笑みながら、そして呆れたかのよつに発する

「といつか…。あんたらが騒いだせいで外は仮装パーティー会場に変わつてるぜ…。ましてや警察までもがこんなに群がつてるたあ俺達あこんなところで

「どうせてめえら逃がしても被害者としてマッパに捕まる訳にはいかねえんだよ…。

とつ捕まえられ聴衆され…

あげく俺達は、牢獄行きだ

「そうなる前に…」

力チャ

力チャ 力チャ力チャ…

「あんたらも…すぐさま

息のね止まらせてやつから安心して逝つてくれよ…

…今ならあの女とでも会えんじゃねえのか？」 クスクス…笑
いながら、黒づくめの男達は人質（銀時含め…）に向けて、銃を向
ける

銀時は、「洞爺湖」と描かれた木刀をギュッと握りしめる…が
相手は拳銃を持っている…ましてや自分が動けばまた犠牲者がでる
ということを想定し、ただ黒づくめの男達を睨むことしか出来ずに
いた…。何もできない自分に唇を噛み締め手汗が滲むほど木刀を握
りしめたまま…

「ではでは皆…さん」

カチッ…

引き金を引く

「未来でまた…

会えたら…」

…

誰もが死を覚悟した…

銀時と長谷川さんは一回田の死を覚悟して

だが

次は本当の死を

「……だ」

「あつ……？」

41

「死ぬのはてめえーら
だああああああー！ー！ー！」

耳を塞ぎたくなるような声をあげたほうに視線ごと体を向ける

さつきまで、「サナ！」と

名前を呼び続けてた高校生があの時とは、嘘のよくな顔つきをしていた

瞳孔は開き、ずっと見ていれば今にも殺されそうな顔つきをしていた

かもうもはや、

鬼の形相と呼んで良いほどの

すると

いつのまにか何処から取り出したか知らないが

その高校生の手にはバズーカが抱えられていた

（まさか……？）この状況つてまさかのまさか……）皆が、口に溜まつていた唾を飲む それが合図のようだ

バゴォオオオオン！！

コンビニは屋根」と吹っ飛ばされ、黒づくめの男達は皆、外に放り出された。

銀時達は、黒づくめの男達とは逆の方向に居たため、なんとか命だけは免れた

だが

銀時等は、顎が外れたかのようにポカーン…開いた口がなかなか塞がらない…。第一何故、高校生がバズーカなんぞ危なつかしい道具

を持つてるんだ ？

というのが、

疑問だつだ

一方その女は、モクモクと茶色い砂煙が出ている所をシルエットを見せながら歩いていき、砂煙から出て来る時に姿をあらわにした。

「たくつとんだ茶番に付き合わされたですー！」パンパンッと服についた砂を払い落しながら

「ちよつと新羅つ！…いつまで屍、氣取りしてゐつもりですっ！何が「サナ」ですか！…偽名も冗談もほどほどにするですっ！こんな長て芝居討つてあげたんですから給料60%羥羽に渡すです！」

（えつなつ何…？

この娘？芝居とか言つてゐるけど…？サナ…？偽名？
つて…まさか
……この女…）

ゆつくり首をその『サナ』とこつ死体…に向ける…。

「……ちょっと…バズーカだけは使つたりて言つたでしょ…！…いくら威力が1／3だからって警察がコンビニ全壊してどうすんのよ…！それに給料60%なんてあげれるわけないでしょ…」

あんたこそ冗談ほどほどにしなやー」

死体が話した…ましてやむくつと起き上がる

コンビニの中の人々は、（アア…アアア）
と絶句した…と声が震える…

そして、すぐに立ち上がり、銀時達のすぐ横を通りすがる…。

死体だったものが…

「全く～？今日の占いは
12位だつて言つから、たまにはラッキーアイテムでも信じてみよ
うかなと思つて見てたら、『フライパン』
つて書いてあつただから、お腹にしまつといたけど、まさか
フライパンのおかげで命拾いするとはね…。」
スッとお腹から出すると、

もつ毛までのポッコリお腹とは裏腹
とてもスタイルischewなバランスの良い体型になつた

フライパンには、確かに、銃弾が当たつた後が

はつきりと残っていた。そのフライパンを小さい円を描くように
クルクルと回しながら、今だ絶えることなく出ている砂煙をくぐり
抜け、ふて腐れ顔で待っている高校生のもとへ向かう

「貴様等…何者だ…。」

バズーカが放たれた時に熱風が黒づくめの男達をとり囲み
そのまま男達を晴天の空の下へと追いやる

その衝撃で身体が痙攣し動けずいた男達はその二人組の高校生を下
から睨みつける

「あーそつか…。これからあんたらを
牢獄あそこに放り投げる最、名前も知らない人にやられちゃ
虫の居所が悪い
ものだしね…！」

自己紹介しといったほうが良いかもしれないわね…」

赤と黄色のチェック柄スカートのポケットから、スッと小さな手帳
を取り出し、

「バツ！」と片手でその中身を男達に見せる

「はじめまして諸君等…

つい最近、新しく『隊長』として任命された

真選組四番隊隊長

連沢新羅……つと」

ちりりと横に視線を送る

……ハアーッと

一つため息をついてから

「同じく『副隊長』として新しく任命された

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽……ですか……」

言つ終わるとその高校生……否、真選組四番隊隊長
連沢新羅は

「やれやへつ

とい「コツ」と威勢の良い声と満面な笑顔で
自己紹介を終えた

丘のハシキーマイテムつて必要なやつや実は幸運の持ち主（後書き）

「ノハリ一編は終わりです！」

次からは、本編？らしいのが始まります

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい

「ばつ…馬鹿な…真選組は男しかいない武装警察の集団のはずだ…女が所属してるなど聞いたことがない！第一、女が『隊長』などに任命を任されるなど以つての外！お前達のような女がこの俺達…いやましてや攘夷志士などを捕らえられるわけなつ…

グジョブウー！」

一人の男の顔は顔面から一瞬にして地面に埋め込まれた
その翠羽という女の足に操られるかのように

地面はメキメキ…と痛々しく悲鳴^鳴をあげるも、翠羽はそんなことお構いなしに男の後頭部にローファーを履いた足を乗せ地面へ誘う

「女女女女…うつぞしいです。」「ヴグウー」さらに足に力を加え、男の後頭部が見えなくなるくらい地面に押し付ける

「女舐めたら、怖いですか？」

フフフ…と優しく

黒い微笑みをする彼女はまわしく…サドつ！

眞がゾゾゾと鳥肌が

立つくらいに 肌で実感した

「翠羽…ほどほどにしなさい。それ以上やつたら本当に死ぬわよ。
それ」

それと指差すのは地面に

押し付けられている男のことだった。

確かに、地面に押し付けられている状態なのだから

その男はまともな空気を取り入れられる訳もない。

虫の息ほどにしか

してないのは事実。

「……新羅がそこまで言つなら……少しは手加減しても良いです。
少し力を緩めた。

だがけして、足を退けた

わけではなく、まともな空気を吸える程度に…。

「そろそろ、あの人等も来る頃じゃない？」

の人等……？ああ……真選組のこと……。

と、新羅の顔を見て、頷く

「ほら、もう少しの辛抱です。牢獄に入る覚悟は出来てるんでしょ
うね……。」

黒づくめの男達に聞こえる程度に声を出す。その声は男達を脅迫するかのようだ

男達の身体は今だに痙攣しているため、逃げようとも逃げられずになった。牢獄に入る準備は万全だ。

一人除いては……。

「クククッ……俺達はてめえーいらマッパに捕まる訳にはいかねえんだ
よ……」

「ハツ？」声のする方に身体は動かさず、視線だけを送る。

黒づくめの男達は全員身体が痙攣していく動けずいたかと思つて
いたが、

その男だけは、身体は動けずも、手首だけは動かしていた。そして
すぐ傍にあつた銃を新羅へと向け…

「あばよ…」

と言い残し

一回発砲した

その一部始終を見ていた、結野アナ達も、声に出せずにその映像を
テレビに映させてることしか出来なかつた。

男は勝つたとでも思つたのだろう。

男の額には「勝利」という文字が浮かんでいた。

だが

「無駄ですか……」

ボソリ……と呟く。

そして視線を前に戻す。

「……おぐけど、新羅……」

「……！」

皆、またまた顎を外す……。

なんせ、新羅は明後日の方に向に身体を向けながら、
フライパンを持っている
手とは逆の手で

「 」 た な で、 命 落 と す ば じ や つ じ ゃ な い で す か ら 一 」

人差し指と中指の真ん中に一つの銃弾をしつかりと
挟んでいたのだから 。

「 アツ アア …… アツ …… ！」

銃を構える手が震える…。

新羅は、振り向き

間に挟めた銃弾を男に微笑みながら見せる。

そして、その銃弾をフワツとスロモーのよつて投げ、ガシッと素早くキャッチする。「翠羽…。」

「はいっ」

威勢の良い声で振り向く

「その男…。私が管理しとくから貴方は」の男に“女の恩を” とい
うものを思い知らせてあげなさい」

バチッ とウインクしながらとんでもないことを発した。

「アイアイサーです」

二人は、持ち場を交換し、翠羽はムチ、新羅はアメの使いようを分
けた

その時、

頓狂な声が、歌舞伎町に

響いた

「御用改めである！真選組だ！」

武装警察真選組とはまさしく彼等の「」とを並べ

別の名幕府の犬は

今現場へと至着した

満面な笑顔で

「？誰が二口チン中毒だ！………
ていつかお前等なんだそれ……」

「何つて？」「頭にクエスチョンマークを浮かばせる。

「お前の後ろの煙が出てる物体。」
んで連沢の踏み付けてるそのやつ。

L

「何って…」

「INのコンビニを襲つた

「強盗犯どもだけど？」

声を挿えて

「何か？」と言つ。

「おおお前達、まさか一人だけでこいつらをとつ捕まえたのか！」

真選組局長ゴリ…近藤勲が焦りながら問つ。

「せうだけど…。何か問題でも？」

「凄いじゃないか！お前等！問題以上に、お前等の手でこの強盗犯を捕まえるとは…！やはつお前達を隊長、副隊長に任命して良かつた！」

俺の目に狂いはなかつた…「あつたよーーアンタよく目擦つてみてみろ！…なんでこいつ地面に頭

減り込んでるの！なんで

身体から煙出てんの？なんでコンビニ全壊してんの…」

一つ一つ指を差しながら、堪忍袋がキレるほど
どでかい声をあげる。

「だつてこいつらムカついたんですもん！なんか女女女女…ううざ

しかつたし

「それはただでめえ自身のムシャクシャを晴らしたかつただけだろ
つ？」

じゃあこの「パンペー」は？」

「それも翠羽がやつたことです！」こいつら新羅に発砲したんですよ
！それがムカつかないでいられますか！だからバズーカ使って外に
吹つ飛ばしてやつたです！」腕を組み、鼻をフンッと鳴らす。

「お前のそういう神経を吹つ飛ばしたらどうだつ……
てかどこからバズーカ取り出した……！」

「いや取り出したつていいか…元々あつた…的な？」

「はつ？」

「すいません。土方さん…俺この事件が起きる前この「パンペー」で
バズーカ
置いてきちゃいやした…」真選組一番隊隊長沖田総悟は土方をキレ
させようと挑発した。

「おんめえは！……」

ピキッと血管がキレる直前に新羅は

「まあまあ……バズーカがあつたからこそ人質の命が救われた……って
思考パターンをプラスに変えても良いのでは？」

と言われ、

なんとか修羅場にならずに済んだ。

総悟が小さくチッと舌打ちをしたことは誰も知らない

「おいつ……奥平つ……めえは後でじょっぴいてやる……

にじてもコンビニはこの有様……！

つてことはまさかお前人質……」

「まさかっ！

私もそこまで馬鹿じゃないです……」こいつらがコンビニはともかく
人質の命は全員無事ですぅ！

任務は遂行した！とでも言いたいのかグッジョブサインで現した。

警察ともあううお方が人質の命を取る失態など起こしたら幕府の犬
の恥の上塗りどころか今この場所で
彼女等の腹を斬らなくては示しがつかない

そんな手間が省けた土方は「そつか…」と言だけ告げ

「ジ…ジと靴を鳴らしながら歩いていき、全壊したコンビニ（一応）？のなかに入る前に、煙草を地面に落とし潰した後

人質のもとに歩み寄る

「すみません…皆さん。怖い思いをさせてしまい本当にすみ……」

ちらつと人質が集う場所とは異なる場所に視線を向ける。

正確に言えば、人質達の集う場所のちょうど左側に視線を向ける。

「万事屋…？」

「んあ…？」「コチソ中毒…！」

「――「チャン中毒じゃねええ！」

今度は完全に血管が切れた

ダッダッダッダッ

ガシッ

銀時に近寄り、胸倉を掴み無理矢理立たせる

「おーー！てめえ、」じちり今無性に虫の居所が悪いんだよ。あんまり
ストレス抱えさせんな？」

眉をピクピクさせながら銀時に言つ。胸倉を掴む手をバツと離し、
逆に銀時が土方の胸倉を掴む

「アアつ？お前誰に
物言つてんの。」じつちほジヤンプ買ひにコンビニ寄つただけなんだ
よ。

なのに何これ。

なんでこんな事件に主人公が巻き込まれてんの！――なんで危機的状
況にあつてんの！

胸倉を掴む手をバツと離し、また土方は銀時の胸倉を掴み今度は壁
にダンツーと激しい音と共にぶつける！

「んなてめえのおつかい話なんざ知らねえよ？
いいからとつとと失せろつ！－田障りなんだよつ－」同じく、銀時
も土方の胸倉を掴み反対側の壁にぶつける

「アンタさあ、じつちは
被害者なんだよ！れつきとした“人質”なんだよつ？もう少し扱い
良くしたらどうだ」

ガシツ

「てめえの何処が
人質なんだよ。おめえがおだぶつしてくれるんだつたらひつとは扱
い方を変えてやつても良いぜ」

「アアツ？」
「アアツ！－！？」

コンビニの中でガミガミと激しく口論する二人の声はまつきと外
に漏れていた

「こしてもてめえりんとこいやつがうこう教育をせんんだよ－」

「やつ…?」

「ちょっと…アンタたちの声外にタダ漏れしてるんだけど…もう少しボソボソ…落とせば…?」「ソソソーの中に耳を塞ぎながらやつてきた

新羅 そして翠羽

「やつ…やつ…

この女共の事言つてんの…」

銀時は、彼女等をビシッと指差しながら囁く。

「多串君つ…君この娘達にどんな教育をせんの…なんでこんな女共がてめえらみてえ糞集団の隊長、副隊長に勤めてんの……つーか武装警察に女が入つてる時点で可笑しいだろつ…!」

ゼーゼーと激しく

息をなす。

「それ…

「あ…あのや…。」

新羅はちゅつと困り顔で話し掛けた

「此處で話すのもなんだから外そっちで話さない？」

皆頷き… そうですね、
そうだなと言こ
外へと歩き出す

新羅は、歩きだす前に
人質の皆さんに顔を向け

「皆さんも外に出でください。この建物いつ崩れるかわかりません
し、中には怪我をしている人もいるやもしないですから。

今四番隊が皆さんを手配してくれます。今日は本当に申し訳ありません
せん。」

礼儀正しくお辞儀をし、

「後でまた改めて謝罪あやまつせん」 と言つて
歩きだす

外では、四番隊の隊士が

万全な態勢を整え、指示が出るのを待つていた。

隊士達の横を通り過ぎる最

「後はよろしく…」
と指示を出した

「はつ…ハイツ…！」隊士達は、自分のポジションへと着く。自身の仕事を成し遂げる為に

外に出るとさつきまで銃を向けていた男達は、真選組に取り押されられ、パトカーに入れられていたり

マスコミに取材を受けてテンパっている真選組等などと…。外はガヤガヤと騒然な不陰気になっていた

「おーいーーー！」

翠羽は初対面にも関わらず馴れ馴れしく呼ぶ

「ハアー」つと頭をボリボリかきながら一人の元へ行く

「…あれっ？多串君は…？」

さつきまで口論していた多串…土方は何処にもいなかつた。

「たぐ
…
?」

「ああーー」「コチン中毒ですかーーー」「コチン中毒ならマスク//」と捕まつてますよー」「ホラ」と笑顔でその方向に視線を向ける。そこには報道陣の真ん中に立つて取材を受けている土方がいた。

「まつあんなやついないほうが話は進むですー、
気にしないー気にしない！」

手を横に振り、
気にしない…と振る。

「おつ万事屋…――お前なんで」JんなどJぬに…?」

近藤が、「ハハハ」の中から出て来て、じりじりと近寄る。

「 ものハネ、」云ふべからず。」

「あつ近藤さん！！

近藤さんもこの方とお知り合いなのでしょうか？」

新羅は近藤に問う。

「まあな、知り合いというか腐れ縁つてやつか？」ハハハつ！…と

両手を頭の後ろに回しながら照れ臭そうに笑う。今此處に土方が居合わせていたらまた修羅場と化していただろう……。
多分……！

一方銀時は
ケツ！と耳をほじくりながら明白に言つあからねず

「へえーそなんですか！」新羅は優しい笑顔で微笑む

「あつ……お前等も自己紹介したりひとつだ……？お前達も晴れて隊長・副隊長に任命されたんだ。名前くらい覚えてもらひつ義務くらいはあるだろ？……？なつ万事屋……！」

肩を、パンパンと叩き、無邪気な笑顔で「なつ！」と言つ。

「あつ……ああ……」

（もう知つてんですけどー強盗犯に教えてた時、俺もつしつちやつたし！
てかもう小説の内容のなかにモロ名前ポロリしてんじやん）「んじ
やあ……私から

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅……」

「同じく真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

です」

「よろしく…です。」

万事屋と手を交わす

「よろしくね…万事屋さん」「えつ…」

銀時は、啞然とする

「そんなびっくりした顔

しないでよー！土方や近藤さん達が貴方の事そう呼んでたから呼んで
みただけ…！なんか悪かつたかしら？」

「あつ…いやそういうことじゃなくて…。」（今の…。）

「フフフ…頼もしい人！反応が鈍い人つて私好きよー！」

「はつ…？」

「嘘嘘ー！」

からかってみたかっただけ…というより私貴方の名前も知りたい
んだけど…。紹介して貰いたいなって…。」

「あつ…俺は坂田銀時。

“万事屋銀ちゃん”って所で働いている。」

「あ～だから皆万事屋って呼んでいるのね！んじゃあ…ええって…銀時って呼んでも良いかしら？」

「ああ呼び方は別に何でも…」

「あつ…じゃあ改めてようしくね！銀時…」

「ううちこよろしくな…」

二人は手を交わす

?

…何かがおかしい…

…何かが…

…！

(…じいつ…まさか…。)

銀時は何かを察知したらしく新羅の顔をジッと見つめる。

ハツ！…と新羅はそれに気づいたらしくバツ！と交わした手を無理矢理離す。

「そつ…

それにもしても今日は雲一つない晴天な空よねー」「…」
新羅は何もなかつたかのよつに空を見上げた。

「ああそつだな…。」

（間違いねえ…」「こつ…）

チャン サン
んさん 、ちさん

銀さんあああん！

銀ちりやややん！

「…！」

声のする方に目を配つた

そこには

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい（後書き）

眼鏡をかけた少年 と

チャイナドレスを着た少女
とてもない速さで
こちらに迫ってきた

が

どんな人間も皆生きているんだ！友達なんだ！（前書き）

早めに更新しました！

どんな人間も皆生きているんだ！友達なんだ！

ものすごい速さで銀時等の前に姿を現した者。

それは

「新八つ！神楽つ！お前等なんで此処に……！」

「ゼー……なんでつ……ハ一銀さん帰つて……
来ないなつて思つたら……ゼヒー……テレビに……映つたのが……」の口
ンビニで……それも強盗事件だつていうから……

「だから……ゼヒー……私達……心配で心配で……家から飛び出して來たア
ル……！」

「

「おまえら……」

「ゲホッゲホッ……」

咳ばらいする神楽の背中を優しく撫で、片方の手を
新八の頭にポンッと乗せる。

そして

「あんがとな……。」

銀時は一人にもう大丈夫だ……と微笑みながら告げる

神楽と新八は

「ヒヒーーー」と無邪氣に笑う

「銀時……。」Jの子達は?」

新羅は、その場の空気を壊すかのよつて問う

「あーーーこつらは俺の……」

「家族ですっーーー！」

新八は、銀時の大きな

手を頭に乗せたまま振り返り、新羅に告げる。

「そうアルーーー銀ちゃんもこんな地味で冴えない新八も私は大好き
アルつーーー！」

神楽も、頬を赤く染めながら照れ臭そうに言つ。

「まあっ血は繋がつてねえけどよ！」

その三人は太陽の光のよつにとても眩しく見えた。

その笑顔が眩しくて。

まるで

本当の“家族”のように

「そう…」

そんな三人を眩しく見ていた新羅は

また優しい笑顔で微笑んだ

「つて…なんかすみません！初対面の方にこんな変なこと…四つの
もあれなんんですけど…
なんだか僕達、“家族”
というものがどれだけ大切な事かつてことを改めて分かつた気がす
るんです！」

「改めて…？」

「えっ！

いや元々家族というものは大切なものだ…このは
わかっていた事なんんですけど…なんだか…ねつ神楽ちゃん…」

「わっ私に振るなアル！…んと…

とつ！とにかく！

顔を梅干しのよう、赤く染める神樂。

「ブツ！ 神楽ちゃんそれ理由になつてないよー。」

「ううつ五月蠅いアルつ！駄眼鏡！！」

「駄眼鏡つて呼ばないで下さいつ……！」

「眼鏡ザルつ！」

「名前変えりや良いつてもんじやねえんだよー。」

「クスツ

てことは、つまりこの事件があったからこそ
貴方達の家族の絆がより一層深まった…！

つて言いたいのかしら？

新八と神楽は醜い争いをすぐにやめ

「えつ いつ いや…！

そういう事じやなくて？そのええつと…」

「良いのよ良いのよ！子供は単純で扱いやすい」

どつかの感情の鈍い人とは違つてね…」クスッと笑い、視線を銀時
にちらりと向ける。

「はいはいっ…どうもすみませんね…。謝りますよ謝れば良いんだ
る…。謝れば…」

銀時は鼻をほじくつながらハイハイと言ひ、指についた鼻糞をブンッと飛ばす

「別に銀時つて決め付けてるわけじゃないわよ」

「その……やめてくんない？腹立つんだけどーーー！」

「そういえば……貴方達の名前まだ聞いてなかつたわね……よろしくなれば教えてくれない？」

「聞けええええええええええ？」

銀時の話をスルーした新羅は、キレられながらもまたもやスルーし、新八達に、「お願ひ……！」と両手を合わせ頼む。

「あつ勿論つ！！僕の名前は志村新八……つて言ひますようじくお願いします！」

「

「へこひよりやうじく」

だが新羅は、「よひしへ」と心を交じらわせるも…

何故か手を
交わせよつとはしない

それを、疑問に思つ銀時

「はーい（^○^）／

次は私アル

私の名前は 神楽つて言つアル
この歌舞伎町（町）の

女王ネ

よろしくアル

「ええよろしく

やはり

神楽にも 手を交わらせよつとしなかつた。

何故 ? やはりあの時のせ… !

「んじゃあ次は私…

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅

よろしく…

「お前真選組だったアルか！あの二口中、ゴロ、サドがいる税金泥棒がいるあそこの四番隊隊長だったアルか…！」

「ええ…でも隊長に就任したのはつこ二日前だけビ…

「二口前…」

ガシツ

神楽は新羅の両肩をしつかり掴む。だが身長が足りないせいか神楽は爪先立ちをし背伸びをすることで新羅の身長にちょうどたどり着くことが出来た。

「新羅！今からでも遅くないアル！今すぐ“万事屋銀ちゃん”に転任するアル！！」

「えつええ？」

「お前あんな男真つ盛りな集団の中に居て、息苦しそうて思ったこと一つ一つ思つたことあるだろつ……！」

「えつ……と、まあ、確かに一回ぐらいあつたか……ウグッ……！」

両肩に力をさらに加えられ棒直状態に陥つた。

「だつたら今すぐエネゴリ共に退職届け出しにいつて退職金搔つ攫つて持つてくれるアロシ……」

「神楽ちゃん…それまだお金が欲しいだけじゃ……」

「神楽…」めんこさー…

いつのまにか神楽の手は、新羅の肩から離れていた

「あれ？」

神楽自身も自分の手がいつ新羅の肩から離れていたか知らずに た
だ新羅の顔を低い位置から顔を見上げる」としか出来なかつた。

ポンッと神楽の頭に手を乗せ

そしてとても

あの時の笑顔が嘘のよつに とても悲哀な顔で
話し始める。

「私達が、この歌舞伎町の庶民の命を守るが為、真選組に入ったのは言つまでもないけれど

それ依然にこの真選組に入った理由もあるのよ。」

「理由…? 何アルかそれ?」

「それはまた後で教えてあげる。いづれ言つときは来るから…。」

薄く微笑んでから、

頭をポンポンッと軽く叩くと後ろに数歩さがり
神楽から離れる

「翠羽も血口紹介しなさ…あれつ…?」

翠羽！翠羽！翠羽！翠羽！

辺りをぐるぐると見回しながら声をあげる

「此処です。此処！」 声のする方に目を向けると翠羽はいつのまにかパトカーの助手席の窓から顔を出していた

「なんか今さつき此処らでひつたくり事件が起きたみたいなんですう！」

だからちょっと私達行ってくるですう！」

「エレベーター」

ブオオオオオン！

乱暴にエンジンを掛ける音が鳴り響き
もの凄い速さでスピードを出しながらターンをし、気がつけば翠
羽の乗るパトカーはあらんじほどに小さくなつて見えた

「あちやー？翠羽にも血口紹介をせよつとしたりだけじね…」少し
苦笑いをしながら、「じゃあ…あのこ」の
代わりに私が紹介するわね

あの娘は私と同じ
真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

ちよつと口汚い部分もあるけど仲良くなしてあげて…。

それにあの娘…

戦争孤児だから…。」

顔を俯きながら、翠羽の過去を話す

「戦争で親を亡くしてからそれ以来、私以外の

人にあまり接しなくなつてね…。でも

あの娘多分貴方達となら打ち解けあえるかもしれない

さつき銀時とも初対面にも関わらず、普通に対話していいたしね！だから…」

「分かったネ

私こうみえてとてもフレンドリー・アル すぐに翠羽とも仲良くなつてみせるアル！－ねつ新ハ！」

「うん！僕達も翠羽さんと心通わせたいです！」

「そう！それはとても有り難いわ！あつでも一つ約束して…」

スッ…と

人差し指を唇の前に立て

「翠羽が戦争孤児だつた事は貴方達以外誰にも口にして無いから、翠羽にはともかく誰にも口を滑らさないよう…！」

「分かりました！！」

「新羅隊長ーー！今

翠羽副隊長から連絡がきました！ ひつたくり事件を起こした犯人を捕まえたらしいのですが、どうやら何か面倒事が起こってるらしいです。

事が大きくなる前に…と告げたあと連絡が途絶えました。

緊急要請です。いかがなさいましょう。」

一人の隊士が新羅に

遠くの方から、ひつたくり事件の事々を報告する。

「分かったー今すぐそっちに向かうわー！」

隊士に告げると、フウーとため息をつき、銀時らの顔を見る

「残念だけど、そろそろ私も行かなくちゃいけないわ！私も隊長としての指令も受けもつていいんでね…。」

近いうち、ゆっくりとまたお話ししましょう…。今度は立ち話ではなく、ファミレスとかでね…。その時は翠羽も連れていくから、改めて自己紹介させるわね…。」

「ハイッ！ぐれぐれも
氣をつけて！」神楽と新ハに笑顔で
手を振り、銀時の横を通り過ぎる最

神楽や新ハに聞こえない程度の声で

「良い仲間を持ったわね…

幸せそうで何よつ…
でも

氣をつけた方が良いわよ…

貴方を狙う…いや殺すとしている人間がまだこの街に居るかもしね
ないから…。」

耳元で囁くその透き通るような美しい声は、

銀時に

『恐怖感』…といつもの抱かせる

「つ…！…てめえ…！…一体
「…！…！」

新羅をキッ！と鋭い眼差しで新羅を睨む

だが新羅は

怯える様子もなくただ

異常と言つて良いほどに、笑っていた

だが至つて普通の

笑顔ではない

いびつに
微笑むかのよう

風が吹くと、新羅の髪は
一本一本が靡く

靡いた髪は

その怪しく笑う顔に
覆いかぶさるかのように

風が弱くなるにつれ、髪は顔からゆっくり一本一本
離れていき、また元の
位置へと戻る

その至つて正常ではなかつた顔は髪が元の位置に戻つたタイミング
と同様に、
顔もごく普通の女の顔に戻つていた。

あの時の顔がまるで
嘘だつたかのよつに

あの顔は 幻だったのか
それとも
？ ？

「口うと笑いながら
「さよなら
「

そう言ひ、銀時等に別れを告げた。

新羅は小走りに走りながら

隊士達の元へ急ぐ

その途中、

「ヤリ…といびつな微笑みを浮かべながら、
独り言のようにな

「やつと…

やつと念えましたね……。

この時をどれだけ愉しみにしていたか……

貴方には想像も

つかなこでしょうね……。」

小走りに走る足をゆっくりと止め、

銀河の果てまで続く
遠い空へ向かって

歪んだ笑顔を向けながら呟いた
。

「白夜叉……。」「じ。

止めた足をまた小走りに走らせながら

女は自分の任務を遂行させるために

隊長としての任命を果たすために

自分の持ち場へと駆ける

気付いた時には、

そこには奇妙に笑う女

は既に居なく

江戸を…歌舞伎町を護らんとする 勇敢な女が

一人そこにはいた

どんな人間も皆生きているんだ！友達なんだ！（後書き）

新羅はどうして銀時が白夜叉だってことを知つてたんでしょうね？

それも後ほど分かります！

真夜中、一人で歩いてちやいけません！…だからといって複数なら良ことは許

銀) なあ…。俺思つんだけど…。

新) なんですか？

銀) この小説次話投稿すんの遅くね？

新) ……まつ…まあ…

人には色んな事情というものがありますからね！
仕方ないんじやないですか？」

銀) その割にはアクセス数は良いってこれビックリ！

（神）いつも急けてる作者のくせに、アクセス数は上昇って何かムカ
つくアル！

（新）良いことじゅないですか！…どんなに作者急けてたって裏では皆
に見てもうれるよう頑張ってるんですよ！

（銀）急けゝアクセス数…。これって新ハゝメガネいけんじやねえ
か？

（神）それ良いアル！さすが銀ちゃんアル！！

（新）てめえら…！

殺すううううう！

真夜中、一人で歩いていたやいけませんか……だからといって複数なら良ことは許

その日の真夜中

針は一回田の12時を回り

新たな日を

満月と共に迎えた

かぐや姫でも降りて来そうな、どでかい満月の下を

一人の女は

「ジ…ジ…とピンヒールの音を鳴らしながら
暗闇を美しく奏でる

「ハアーっ…全く…何で翠羽達が見回りなんてやらんこもいけな

いんですか？「

遡る」と一時間前

今日はどうも珍しく歌舞伎町内で事件が発し、翠羽達はいつもの3時間は残業していた
無理に言えば、無理矢理
駆り出された！
と言つても過言ではない。

屯所で食事を済ませた後、各自の部屋に戻り（新羅と翠羽は同部屋）

今日あつた事件の資料を見ていた

……勿論新羅だけ。

翠羽は…、

頬に手を当て、肘を机につけながら資料を開いてるも疲れが身体を
蝕み
カクンつーと
首をうならせる。

トントン…

「誰？」

「俺だつ…土方だ…」

ガラッ

真選組副長マヨ…土方十四郎はつれない顔で障子を開けた

「こんな時間にどうしたの？」

「レディーの部屋に向のよつです…」

「单刀直入に言つ…！
てめえら今から
見回り行つて来い！」

「はつ？」

彼女達は、阿吽の呼吸かのよつに息ピッタリに首を右に傾げる。

「ちゅう？」

「ちゅうと待つですー。今日の見回りは沖田のせいですー。なんで私達が…」

土方は「あ、あつ！」と唸り頭を抱える。

「アイツまたサボりやがった…？隊士達は全員別の事件の調査で今さつき屯所を出でていった。
総悟はざっかしらで油売つてゐはすだ。俺は総悟を探して屯所を外す。

近藤さんには、何かあつた時の為に屯所に残つてもらつー。んで代わりにおめえらは歌舞伎町を見回り警護しにいかけつー。

「だからちゅー！」

「ちゅうは今日の事件等で身体がもう悲鳴あげてるんです！私達女一
同一

もつまんじりと寝ないといけない時間…」

バリツ！！

土方は指で障子を鈍い音と共に切り裂く

「いつ何処で何時何分何秒地球が何回廻った日に俺がてめえらを女と認めたんだ？あ、あ！」

さつさとその眠たげな顔叩き起こして、歌舞伎町内ひとつと見回り行けっ！」

翠羽はその声で、
パツと目を覚まし

足の爪先から鳥肌がたつのを感じた。

翠羽と新羅は彼が

鬼の副長

と呼ばれる意味を改めて知ることとなる。

そして“今現在”と繋がる。

翠羽は両手を頭の後ろで組み、「ふあーあ…」と悪評をする

「夜更かしは美容の大敵だつてのに…あの二口中何も分かつてないです！」

「一かあのサド…！」

帰つたら二口中殺る前に
真つ先に殺してやるです！」

「翠羽…総悟は殺しても良いけど、土方は駄目よ！」

総悟探しにいつてくれてるんだから！アンタが探す手間が省けたつてことなのよ！礼の一つでも言つたら？」

（や…そんな笑みで殺す…とか普通に言つアンタが一番駄目だと思
うけど…。）

翠羽は苦笑いをしながら

「あ…ああそう…ですね」とつて敬語で返答する

「二…にしても、今日は随分と綺麗な満月ですう…」

話を反らやうとするが、確かに今日は妙に

月に一度見る”ぐ普通の
満月より、今日の満月は以上なほど赤い
紅色をしていた。

その満月から放たれている月光が彼女等を美しく飾る。

「そういえば…。新羅貴方つて…」

「伏せてつーー！」

「えつ…ちよつーー！」

素早く翠羽の身体を地面に俯せにさせる。

新羅も翠羽の隣で俯せ状態になる。

…

五秒ほどたつただろ？新羅は顔をあげる。

すると 前には

何本かのクナイが荒々しく地面に突き刺さっていた。

「なーんだ…。
月に見取れて

勘付かないかと思った。「後方のすぐ傍から女の声が闇の中から聞こえてきた。

スツと立ち上がり隊長服に付いた砂をパンパンッと叩き落としスカーフをキュッと締める。

「相変わらず色氣のない
登場ね……。」

クルッと髪を風に靡かせながら振り返り、電柱の頭にのつている青い髪のショートヘアの女を顎を少しあげながら見上げる。

「久しぶりね……。

蒼
琉
.....
」

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんつ……だからといって複数なら良ことは許

これでオリキヤ「全員集合しましたね

○時だよつー全員集合ーー

■のモリで何本あるんだね。 (前書き)

いやーめっちゃ更新してなかつた?おかげで、アクセス数がヤバ
ヤバスつ!!

ではではどうぞ~

髪の毛つて向本あるんだろ？

「蒼琉つ！！！」

「やあ翠羽つ！久しぶりの再会だね……」

そう言った後、蝶が舞い降りるかのように電柱から地面に降りる。

「蒼琉——！！！」

まるで

はしゃぐ小さな子供かの

よう』『蒼琉』という少女の元へ腕を横に真っ直ぐ伸ばしながら駆け出す。そしてバツ！と蒼琉に抱き着く。

「蒼琉！会いたかったです！まさか此処に来てから4日も会えなかつたとは思わなかつたですう。」

翠羽は、蒼琉の小さな身体をググッ！と締め付けるように厚く抱く。今にも骨が折れそうなくらいに…。

「そんなおおげさ過ぎだよ。たかが4日だろ？」「蒼琉は締め付けられる自分の身体に我慢つ…と言い聞かせハハハ…と笑いながら堪える。

「でも…」の四回向處に行つてたですか？」

「ちよつと用事があつてね君にも一応関係のある話だよ…。」

「なつなんですか…翠羽に関係のある話つて…？」

「ハハッ そのうち分かるよ…。」

「だけど…。」

田つやが「ロッ」と変わつ

「君にはとても関係深い話だけね…新羅」

翠羽に向けていた笑顔とは裏腹に新羅には

感情の一つのカケラも無い顔をスッと新羅へ向ける。

「せつかくの久々の再会だつてのに何その別人のよつな顔！」クス
ツと肩を竦め

蒼琉にニコツと微笑み 投げ掛ける。

「そりですよ蒼琉！せつかくの再会なのですから新羅に……」

そう言い終わる前に、翠羽の瞳から蒼琉の姿が一瞬にして消え去つ
た。

「えつ……ちょ蒼……」

辺りを見回すと、蒼琉は翠羽から離れ、変わりに新羅の前方にいた。

だが

蒼琉はただ新羅の前方に立っているのではなく新羅の胸倉（隊長服のスカーフ）をグツ！と蒼琉自身の身体の近くに無理矢理寄せる。

「まさかとはと思うけど
これだいまの挨拶？」

新羅は胸倉を捕まれながらも今だ微笑む。

「そういうことにしてもおこりか新羅…。

話を戻すけど…。

君は此処最近にて真選組に入った。それも隊長にまで就任……。別にそれは君個人が決めたことだから、口を出すつもりはないけど

……」

蒼琉は、胸倉を掴む手にさらに力を加える。

「僕達は
歌舞伎町

(二のまち)に遊びに来たわけじゃない

それくらい、覚えてるよね

「ていうか

蒼琉……首が痛い……離して

胸倉を掴む蒼琉の手首を掴み、離さない手を左右に揺らす。

「新羅……。僕達は……」

「蒼琉…手」

「あの方を…」

「手つ…」

「あの方をや…」

ガシッ…

「だから、離せつひとつなんだからつが…」

まるで別人にでもなつたかのように新羅の田つきがギロツと鋭くなり、胸倉を掴む手を無理矢理剥がす

「言われなくてもアンタの言いたいことは嫌といつほど分かぬ。だけど、私達は歌舞伎町（このまち）にまだ来たばかりじゃない？」。ましてやまだ一ヶ月もたつていない。

だから……」

「ヴァーーーー！」

蒼琉の腕を掴む

新羅の爪が蒼琉の腕に深く食い込む

「もう少し様子見をしたほうが良い」と囁つたけど……

「どう思つ……?」ニコラと微笑みを浮かべる。紅い月光
が当たつてゐるせいか、新羅の微笑む顔がいつになく怖い。

バツ！

新羅の腕から逃げ、新羅の傍から7歩ほど後ろに下がる。掴まれ
ていた自分の腕を見ると、傷一つ無い

白い腕を

赤黒い液体が

ツツと一本の長い線を作り、やがて地面に滴る

「言わぬくとも……

計画は実行する…

コツツコツツ と川辺の近くへ行き、水面に写る月を数秒上田遣いをしてから

上空を見上げ、本物の月に目を向ける。そして
バツ！と片手を奇妙な紅色に染まる満月に二口つ…と笑いながら手を翳す

「 もう少し…

もう少し…

計画が実行される…

だから…」

「新羅貴方まさか……」

翠羽……これは僕達への指命だ……。何がなんでもある方に……。

」

その時、奇妙に照る

紅く染まる月から放たれる紅い月光を浴びる

その

三人の女は

まるで

「それと、蒼琉……」

「何？」

「もしかしたら、私の正体ある男に知られたかもしい……そした
ひ……」

「分かってるよ……」

「その時は……」

「殺せばいいから……」

返り血を浴びた鬼のようだった

。

髪の毛つて何本あるんだね？…。（後輩も）

なんか内容が変なんなってきた。ヤバス…

だるい時に勉強はかなりキツイ（前書き）

銀魂新巻買いましたー

まじ面白い○ ○

だるい時に勉強はかなりキツイ

翌朝…

ここ数日は雲一つの無い
晴れ晴れとした天気が続く。
その青い空は、彼方まで継ぎ田を細めて見て見ても雲といつ物体は
何一つ
見当たらない

秋風は 遠い山々から
落ち葉を舞かせ

次の町 次の町と過ぎ
歌舞伎町へと運ぶ

その葉々の数枚はまた
風に煽られ、

「万事屋銀ちゃん」

と書かれた看板を通り過ぎると

また

新たな

遠い旅へと再出発をする

「暇……

「暇アル……

今日は、

晴れ晴れとした天氣＝
仕事の依頼殺到！！！

なんて夢のまた夢の話…。

現在午後2時ちょいを回った。今日は仕事の依頼が待つたくと言つていい程来ない…。

外へ出て、ファミレスにでも寄り食事をしようつー。

なんて

そんな余裕な金はないつ――――

この頃

仕事の依頼は一日に多くて

一回つ――――

飯代など

家賃代へと姿形を変え何処かへと旅立つ。

他にも

定春の飯代・トイレの砂等でパーになりペット?の生活用品のまつ
が人間様よりも図りしれない。

そもそも銀時等に

“ファミレス”などという

高台へと駆け上がるこさまはず無い。

「にしても暇だ……。

まるで三ヶ月前のジャンプをみて
「この展開何回もみた…。確かヒロイン死ぬんだよね…。ホント泣
いたわー。」

みたいな飽き飽きしながらもジャンプを捲る
心が満たされるようだ

満たされないあの感情と何か似ている…

銀時は、ソファーに横たわりながらジャンプのコマを一つ一つ田を
落とし、ピラッヒ一枚捲る。

「どうか腹減つたね！」

新ハー！..ピザ持つてくるヨロシイ！..」

「そんな金あるわけないでしょー！ただでさえ今月分の給料貰える
かどうか分からんのだし…。」

新ハは割烹着とマスクを着用し、右手には
はたきを持ち棚をパンパンッと叩きながら

「銀をーん！..今月分の給料大丈夫なんでしょうねー？」と飽きれ
声で言つ。

「あー大丈夫大丈夫心配するな…..
今月分のてめえらの給料から差し引いて俺のパフェ代に加算される
からつー！」

バツ ！！！

「何が大丈夫大丈夫だよつ！何差し引くつて！－！なんで僕達の給料がてめえのおやつに加算される訳つ！－！」

新八は無理矢理ジャンプを取り上げて、銀時の顔の近くで怒鳴る ！

「つたく！耳元でうるせえーな！－！仕方ねえーだろ仕事の依頼が来ねえーんだから…。俺は糖分食わねえとこの先どうなつちまつが分かんねえんだから俺の糖分の為にも給料分けてくれよ

なつ！

「なつ！－じやねえーよ」糖分控えろつ！－！－！そしてその金給料代としてこっちに渡せつ！－！天パ馬鹿！－！」

「何その天パ馬鹿つて！－！お前そんな変なあだ名なんて付けつからろくにフィギュアとかキー ホルダー出ねえんだよ！羨ましいだろつ駄メガネちゃん！」

「駄メガネじやねーよー！ つーか今関係ねえーよー！ この元タマ無しー！」

「あ、んーーなんだ
やんのか『ラアツーー』」

「あ、あッ！－！

なんですか！！！！

「ちつちゅいアル。」

神楽は小指を鼻の穴に入れほじくりながらボソッ…と吐く。

ピンポン

「居留守でえーすよ居留守ー。」投げやりに手をシシシシと振り、玄関先まで聞こえる声で口を大きく開く。

「銀さんが出たほうが良いんじゃないですか？」

「馬鹿！策士裂くとはつまつこいつことだ新ハ。」

一つため息を零して

「ひつこの時間帯はジラが来る時間帯とひつひつ一致している。どう考へてもあの玄関先に居るのはジラしか考えられねえ」

「でも銀さん。桂さんならインターほん押しながら「銀さんー。あーやーぼー」とか呟く声がしないですか！それが聞こえないってことは違う人なんじや……」

「ジラも毎回同じポジションで来るとは思えねえ……。まあ裏の裏を読む事これが待への第一歩だ。覚えとけー！」「銀さん……」

「てなわけで……新ハ
ビシツと指差す！

「玄関行つてこい……！」

「ハツ？」

「だから玄関…行つてこいって行つてんだよー！」

「はつおまつ……アンタさつき裏の裏を読めつとか言つたよねー！そつ
あと書ひてる」とまるつさり反比例になつてんじゃねえかー……！」

「んなのちょっと主人公として“侍”的な発言取り入れる為の策に
決まつてるだろつー」コンビ二篇では作者に邪魔されたからな……」

「知りねえーよ……少しは尊敬出来るなと思つたら……」

「新ハ～！ゴタゴタと

□開く暇あんなら足動かせ足～！だからこつまでたつても人気投票

ミラクル8なんだヨ！……」「てめえーいらむつさから僕のコンプレックスに口叩かねえーと気が済まんのかあああ……！」

「えつミラクル8コンプレックス気味だったの？そつかそつかだつたら玄関行つてこい……！」

「意味分かんねえーよ！コンプレックスと玄関何もイコール関係ねえけど！」

ピーンポン

「ほら新ハ！……」
「ほら新ハ！……」

銀時と神楽の声が一致する

「ツー！ハイハイつ！分かりました。出れば良いんでしょ出れば……」

新八は割烹着とマスクを「も」も言いながら外し、はたきを棚に置

いてから玄関に重い足取りで向かう

途中

廊下を歩いてる最中に

「なんでいつもいつも僕が…」と口を尖らせ「ブツブツ」と言しながら、玄関へと近づく

「ハイハイどちら様ですか！桂さんだつたら僕…」

ガラツ！と引き戸を開ける

「…………あつ！」

玄関先のところに立っていた人物に思わず声を上げた。

「どうした？新ハー？新聞ならすぐに断……」

玄関先に立っていた人物

それは

着物はボロボロに破け上は泥が至るところに付いており元の色が何色なのか分からぬ。

髪は結つてゐるのか結つていないので分からぬボサボサした髪。ガリガリに痩せて目には隈がいくつも出来今にも倒れてしまいそうな貪相な顔をした

男が一人

そこには居た

お金の使い道はよく考えろ

そのガリガリに痩せた男は静かに口を開く

「あつ……あの……万事屋さんでいらっしゃい……
ますか……」

その男は多分依頼人であろう。そつ心の中で確信する。

「えつあつ……はい。あつ……あのーとあります中にビリビリ。」

新ハはその男を部屋へと招きいれ、ソファーに座らせる。

新ハは奥の棚から少量のお菓子と湯呑みを持ってきて銀時、神楽、
男の分のお茶を注ぐ。その
湯呑みを一つ一つ前のテーブルにコトシ
と置く。

「んで……。俺達に今日は何の用で?」「銀さん。まず名前を……
新ハは耳元に「ソッ」と囁つ

「ああ……まず名前をお聞きしたいのですが……。」

「たつ……高梨……健二郎です。」

「高梨さんって名前なんですか……。んじゃ あ名前も知ったことないで今日は何の用で……？」

（お前どんだけ依頼内容聞きてえーんだよ！－）
新八は拳に力をぐつ！と入れる

「せい……。」

「？」

「助けてくださいっ！－！」

その男は頭をテーブルすれすれまで深く下げる－

「貴方達も

知つておられるでしょう？あの－！「連続庶民殺人事件」…

「……！」

確かにその事件つて幕府の元で運営する人・また幕府のお偉いさんなどが狙われるのではなく、善良な一般市民だけが狙われる近頃この街に起きているあの…！」新八はその事件について

「前にテレビで見ました」と口を開く

「そうです……。

そして……私の愛する家族もその事件に巻き込まれ、皆死んでしまいました…！」

男は涙をボロボロ流しながらそのぐじゅぐじゅになつた顔を服の裾で拭く

「じゃあアンタの依頼は、その家族とやらを殺つた犯人に仇討ちしたい！」

「ってわけか…？」

銀時は湯呑みに入つたお茶を一気に飲み乾す。

「でもそつだとしたらどうして警察とかに頼まないアルか？」

神楽は片眉を少し上にあげる

その言葉に男はビクッ！と肩を震わす

「そつ…それが

その庶民を狙う犯人つてのが

「真選組の者だと……」

「えつ……！」

三人は目を大きく見開く。

「ちょっと待つアル！ いくら一門中や「ココラ」がいるあの税金泥棒野郎
でもそれは……」

「そうですよ！ ……あの人達は見かけはアレですが幕府の犬ともある
うお方ですよ！ そんなことは……！」

「いや……真選組局長、真選組副長などが関係しているのではなく……

「どうもそここの隊長等などが関係しているという噂が……」

浮かぶ名前…… 一番最初に頭に浮かんだ名前……

（まさか…サドー）（沖田さん…）

二人は冷汗をかく

「で…

ですがこれはれっきとした噂です！テレビではまだ犯人の特徴は確定していませんと書いています。」

「じゃあ…警察に言えねえ理由は、幕府の犬共が殺つたなど口を吐けば、ただ事では済まねえ…。ましてやアンタがこの街の庶民を狙つ何者かに標的にされやすくなるとの理由で俺達に頼んだ…」と

「お恥ずかしながら…」

「だが……こつちもビジネスだ。やすやすと人の命使ってまでその犯人を探しだせとなると

代償は高けえーぞ！」

フッ

「いふなことあるうかと」パチンつー

男は指を鳴らす

ガラツ！

押し入れから全身黒タイツをはいた男一人ほど出て来男の後ろに立つ！

「ちょっと待てーーー！

人ん家からなんで全身黒タイツはいたやつ出でくんだよーー此処は
ドラ もんの世界じやねえんだよーー四次元ポケットから何でも出
て来るレベルのアニメじやねえんだよーーー！」

新八は、全身黒タイツの男達に指をビシッと指しながら口を大きく
開き言葉を吐く。

男は全身黒タイツはいた男達からジュラルミンケースを受け取る。

「まさか……」

三人は睡を「クツ」と飲む
まるで、高級品を前にして落ち着きを抑えるのに精一杯の子供のよ
うに

「（）苦労……

お前達は帰れ……」頭を深く下げ、すたすたと歩き玄関の戸口を開け出でいった。

「おいいいいいい……だつたら最初押し入れから出て来た意味ねえじ
やねーかよ！庶民一般的に玄関から入つて玄関から帰れえええ！！」

新八は玄関に体を向け口が裂けるほど開け言葉を投げ捨てた

「銀ちゃん……どう思います？」

「ではよろしく……」

「いらっしゃつ……」

一人は手を交じらわせ何らかの契約を結んでいた。

「ちょっと待てえええ！僕がツツコンでる空白の何秒間に何があ
つた――――！」

その何秒間前

そのジユラルミンケースを開けた途端、辺り一面が一瞬金色に煌めいた。

「あ……あの……金で釣るってのはどうかと思つたのですがこれ……

1000万です……どうぞ……」

ガシッ

「よろしくお願ひします」銀時は、男の手を両手で握る。

「…………」

以上解説

「ではよろしくお願ひします！—今日の夜にまたお伺いしますので
では……」

深くお辞儀をし、
万事屋を後にした。

「ぎつ銀さん……。

だつ大丈夫なんですか……？あんな依頼受けて……。」

銀時等が食べたお菓子の袋 湯呑みを片付けながら
新八は問う。

「大丈夫だ。それに良く見てみろこれだけの大金だ
！！

「こんなチャンス滅多にねえ……。」

「でつでも……。これだけの金があるんだつたら服なんていぐつも買
えるはずなのに……。なのにあんなボロボロの服……」

変なお金じやなきや良いんですが……

ピーンポン

「あつー。高梨さんじやないですか……？忘れ物でもしたのかな……？」

「つたぐ…。はいはーい今出まーす！」

ガラツ

「なんか忘れ物…」

パチツ

パチツ…

瞬きをする。

目が合づ。

前に立つてゐるのは高梨という男ではなかつた。黒髪ストレートな長髪をした男は腕を組み、鼻を高くして銀時の顔を見るなり

「よお……銀時久しぶりだな！」

「ヅラ……。」かつて

攘夷戦争で共に戦つた

銀時の旧友 桂小太郎

それが彼のことと言つ。

「ハルヒの歌つて意外に高くなーつー?」

バタンッー!

銀時はすぐに扉を閉じた

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

扉を開けようと必死に攻める者と扉を必死に開けまいと抵抗する者の壮絶なバトルが玄関で繰り広げられていた。

家中には、インターホンの音が響き渡り

新ハと神楽も少しづつ

苛立ちを感じてきた頃

銀時は我慢の玄関に達し

ついに

「「うるせえええ！！！」

ガラツ！と扉を乱暴に開け蹴りを一杯入れる

「んだよ！！！何回もインターホン鳴らしやがつて！てめえクレーマーか！！！俺に何かクレーム付けることあんのかコノヤロー！」

「お前に……話があつてきたんだ……マブダチ……」

「てめえーとダチになつた覚えはねえええーー！」

再び銀時の蹴りをくらひ、「ガブヒー」と声を漏らす。

「ちつ……違つつーークレームでもエリザベスが居なくなつたとかフミ子がふしたらとかではないつ！！！お前も知つてゐるだろ？？！」

「連続庶民殺人事件」

「あつ……まあな……！」

「それと俺にじりつこいつ接点があるんだ？」

「ほんなどうで立ち話もなんだ……。中に入らせてもらひつね。 ウツ
ブツ！」

鼻からズバズバ出て来る血を手で押さえながら
銀時の横を通り過ぎる

中へと入る。廊下にはポタ……ポタと
紅い点がちらほらと見えた。

とりあえず新八は湯呑みにお茶を注ぎ、銀時、桂の前に湯呑みを口
トツと置く。

「リーダーと新八君。悪いが少し一人だけで話たいのだが…。」

桂は真剣な眼差しで新八等に言つ。

「分かりました」

「分かつたアル」

そう言つと、二人は万事屋を出て何処かへ歩いていった。

「んで。俺に何の？」

「ズズッ…。んあーー

やはりお茶というのは一番上手いな…！」

微笑みながら

湯呑みを置く

「では本題に入るとしよう

銀時、さつきも聞いたとおりお前「連續庶民殺人事件」知つてい

るな？」「ああやつをもはつたとおつただ。」

「まさかとは思つが、変な依頼など受けもつてなかろうな……？」

「変な依頼？」

銀時は片眉を少し上にあげる

「ああ……。俺の部下から仕入れた確かな情報なのだが

「じつめいその事件で殺られてる奴ら全員、
その依頼をしたされた者ばかりらしい……」

「したされた者……？」

「そいつら密売人かなんかか？」

「いや……密売人ともあらうがただの一般人らしい……

表向き……ではな

「……表向きでは、ただそこらで家などを回り売り物を売り売りしてゐる奴らうしい。

だがその中の多くはある組織に入り、何らかの陰謀を団論んで夜な夜な動き回っているらしい……。

まつ攘夷志士との関係…ましてやこの街への害を加えるような真似
はしないらしいがな…

心配するな…。」

そう言い終わると、近くにあつた煎餅をひょいと掴みバリバリッ！と音をたてながら
口に頬張る

「んで…そいつらの陰謀って一体何なんだ…？」

「……しゃあーな。びゅから聞いたきょとはこのみやでだ…。」

モグモグと

口に頬張り膨れ上がつた顔を一瞬にして元の顔に戻す。

「だが一つ疑問に思つことがあるてな……。」

「？」

「それとも此つたとおつ…

奴らはただの物売り屋…。物を売り、その得た金で家族を養つて生きている者達だ。」

「？」

「それがどうし…？」

「だつたら何故…」

死ぬ必要がある…？」

「……」

「それも物売り屋の奴だけではない。それを買った者までもだ……。もつと例えるならばスーパーの店員とその密が次々殺されていると言つたほうが早いか……？」

「物売り屋と名を名乗りながら何か薬を売つてゐるのはありえないのか」「

「ああ……それは絶対無い。俺の部下が実際そこに潜入したらしいのだが、薬らしき物は一つもなかつたらしい。ただの調度品などが置いてあつたらしい

本当にただの物売り屋らしいのだが……。」

腕を組みウーン……。
難しい顔をする。

「まあ話はこんなところだ。お前もせいぜい気をつけろよ。お前は金の為ならどんな依頼も受け持つような軽い男だ。忠告はした。とにかく物売り屋が依頼に来た。もしくは物を売りに来たなどがあつたら直ぐさま断れ！貴様に

まで死なれては困るからな。良いな？」

「ああ……分かってらあ……」

そつ言つと、銀時は脚の付近に置いてあつたジュラルミンケースをジラ……桂に見つからないよつ足でスッと退かした。

「では、俺はそろそろ帰るところよ。銀時、リーダーと眼鏡君にすまないことお伝え願つ。」

「ああ……分かった。」

「じゅあな……。」

「……じゃない……。」

「一つ言つてやびれたことがあつたー！」

階段を下つてゐる寸前桂は何か思い出したらしく再び銀時の前に姿を現す

「その物売り屋が裏で何かを企ててゐるその組織の名なんだが……

琲
琲
袈
べるか

といつ組織らしー…」

「琲琲袈…？組織の名とこいつよつ人名みたいだな…」

「確かに…。まあもう一度だけ言ひ。せいぜい氣をつけろ。一度曰のじやあな…」

しばらく桂の後ろ姿を見ていたが、その姿も夕日の照る方向へと消えていった。

「琲瑠袈……ねえ……。」

そう独り言を呟く、銀時も万事屋内へと姿を消す。

誰もいなくなつた万事屋内を一人歩く銀時、
それとギシ……ギシ……と軋む音をたてながら廊下を進み桂とツーマン
で話してた
部屋へと入る。

その部屋はあの時とは全く違ひ異様な空気が銀時の回りを漂つ。

その空気を壊すかのようにその部屋へずかずかと入りジユラルミン
ケースへと近付き、ケースを開ける

「依頼ねえ……。」

(変な依頼受けないだろうな……？

どうやらこの事件で殺されている奴全員その依頼をしたされた奴ばかりらしい……。

『氣をつけろ……。

お前にまで死なれては困るからな……。）

「 まさか…… な。」

ジユラルミンケースをパタンと閉め

「そろそろあいつらも帰つてくる頃か.....?」

願う者

仇討ちを

依頼を受けた 変わりに

大金を手にした者

それは

幸運を齎す鴉の声か

はたまた

不幸の音を鳴らす鈴虫の呼び声か
。

「ハヤの歌つて意外に高くなつて…？」（後書き）

銀魂蓮蓬篇めひちや面白

ー・ホジヒリナヤベニー^{WW}

牛乳飲んだら背伸びるとか言つたあれば嘘だからね！

その晩

神楽・新ハは7：00ぐらじに帰宅し 早めの夕ご飯を済ませ

銀時達はいつものたわいのない話をして時間を潰してゐる間に時刻は
10：00を過ぎた。

ピーンポン

一つのインターホンの音が万事屋内に響き渡り

銀時等はたわいのない話をすぐに切り上げ、

定春の頭をわしゃわしゃと撫で、「留守を頼む…」と言つと定春も銀時等の現状を理解したらしく

「ワンヅー」と一つ鳴く。

定春に留守を任し

三人と依頼人は

万事屋銀ちゃんを後にした。歩いて10分はたつただろうか？

高梨という男の後ろをついていき田的地区へと足を進める。横目でちらりと見ると回りの家々の部屋の電気はぼちぼちと消え、明かりが付いている部屋はごくわずかほどしかなかつた。

四人は氣を使つてゐるのか一言も話さず暗闇の中黙々と歩き続ける

憂一
口に出した事と言えば

「#だか…

「あと少しです。」

それ以降、地面をザシザシ…と震でる音が「ンボンボン」と闇とマッチしていた。

「あへへへへへ」

「あそこが……。」

高梨は路地の真ん中をスッと指差す

「私の家族全員が……殺された所です……。」

話に寄れば、高梨の家族は父、母、娘6歳、兄、高梨の五人家族らしい……。だがこの事件に巻き込まれ、高梨以外全員殺された……とのこと……。

「そんな……。それも家族全員だなんて……。酷すぎる……。」

「本当アル……。この事件の犯人……。人散々殺して何が楽しいアルつ……！人殺して強くなるとでも思つ……。」

神楽はハツ！と頭にある人物の面影を思い浮かべた。

「冗談…………」

セツナは顔で笑く。

「……すみません謹さん……。私が仕事依頼したから
謹さんお寒い中此処まで来てくださいたのにどうでもいい話してし
まつて……。」

「こえこえどもいい話なんてとんでもあつません……。」

「私達が見つけたやるアルー。そしたらメシタ斬りにしてやるアルー。
――」

「本物……

「あつがヒツジやることある――。」

んで

その犯人とやらが出て来る星とが付いてるのか？」

銀時は鼻をグリグリとほじくりながら高梨に聞く。

「あつはいつ……確か此処から半径4?以内で事件が多発していると聞いています。」

「半径4? だあー? て」ことは直径8? の中から一人振り絞つて探せ
つて言うのか? んなの「志村けんの鼻がんだティッシュを探すよう
なも……

！」！」！」

突然、女の悲鳴が暗闇の中から聞こえた。その声はそう遠くはなくすぐ近くだと四人は思い、一目散にその場所へ駆ける。

「ていうか志村けんの鼻かんだティッシュより軽く見つけたんですけどー！！！！！」

銀時の吠え声に誰も耳を傾けず銀時除く三人は息を少し上げながら真つ暗闇な闇を駆ける

勿論 銀時もだか :

一人加えてつ：

四人は死角に差し掛かる時に急ブレーキを

足底にかける。

「なつーーー」これは……。」目に止まつた『現実』
といつ名の現実……。

暗闇の中でも良く見えた

泣き崩れている着物姿の女

そして往路には

血まみれの

上半身だけがその場所には残つていた。

ちらつと視線を女がいる場所とは反対側を見る

的中した。

そこには血まみれの下半身が斬られた所からドクドクと赤い液体を
垂らしながら倒れていた

「アツ……アンタ！ 一体何が……。」

高梨は女に震えた声で問う

「アツ……アア……私は……何もしてない……私はただ……」歩……歩いちいちに近寄つて来る。両手を頭の脇に立てながら……。

「私は……死にたくないつ……」んなつ……
「こんなところで死に……」

ズシャアアアアア

女の背中から激しく血が噴き出す。

そのまま女は頭の脇に手を立てたまま顔面から地面へドサッ！と倒れ込む。

女が倒れ込んだ背後に立っていた者は女から噴き出た血を体中に浴びた。

血で染まつていてもそれが何者かは深く考えずともすぐに分かつた。

高梨から聞いていたとおりの真選組隊長服を着用していた。
真選組制服は黒というより鮮血な朱に染められた灰色のストレート
ヘアーナーの女。あのコンビニ事件の時は、私服なのかそれとも変装で
あんなっくの格好をしていたのか分からぬが、
真選組隊長の制服を着ている姿はこれが初めてだ。

女に向けた虚ろな瞳はしばらくするとやがて銀時等へと皿を向けた。

「まつ……まわ……か」

驚愕のあまり誰も

声に出さなかつたが

とつとう新ハが先頭切つて口を開いた。

「そん……な

えい……して……

その刃の先からほ紅黒い液が雲のよう

ポタリ……ポタリと

同じじテンポで墜ちる……。

「新羅さんが……。」

牛乳飲んだら背伸びひとか言つたあれば嘘だからねー（後書き）

真選組四番隊隊長

連沢新羅は

血だらけの刀を
銀時達に向け

「コンビニ以来ですね…」

優しく

でも何処か

あの時とは違った

笑みを見せながら

そう小さく口を開いた

そしてただの『夜』

ひとつ

短い時は終わり

今宵の本当に『夜』の
幕開けとなる

笑顔には裏と表の両方がある

「新羅やん…

ヒリヒリ…！

ヒリヒリ貴方が…！」

「私がどうかした…？」

新羅は薄い笑みでただただ銀時等に手をやる

「ヒリヒリ…！…

新羅やんつ！

貴方 真選組隊長でしょ……

警察ともあらうつお方がなんで……なんで……つ

説明してくださいよ……

新羅さ……

一瞬

新八の周りだけに

生温い風が吹く。

新八は、自分の隣にいる人物に恐怖感を覚えゆっくりと瞳を横に流す。

「だあ～から……

私がどうかしたって聞いてるの……？。

それに……」

耳元に口を近づけ
優しく囁く

「私…………あんまり自分の名前を一度に
何度もしつこく言う男

嫌いよ…………」

その瞬間、新八の身に何が起きたかは銀時等にも新八自身も分から
ない。

ただ新八は、新羅の横で勢いよく倒れた。

その横で倒れた新八を新羅は笑みを見せながら睨みつけ

「良こ夢を……。」と囁いた

「新ハつ……！」

銀時は新ハの元へ駆け付けようとした足を一歩前に出す。

だがそれに気づいた新羅は背中を銀時等に向けていたがすぐに向きを変えた。

「てめえつ……！」銀時は鋭い目つきで新羅を睨みつけた。

「「めんなれ」」別に新ハさんを傷つけようとは思つてなかつたんだけど……つい……

でも安心して……

ただ氣絶してゐるだけ……
直に田が覚めるわよ……」

「そういう問題じゃないアル！！！」

神楽は新羅に向け声のボリュームを上げた。

「新羅…お前何やつてるアルか！！お前はこの街…この歌舞伎町を護る為に真選組に入つたんじゃないアルか！？なのになんで罪の無い人間を殺してるアルか！！！」

「罪の無い人間……？」

「そうアル！！」

「ハハッ…
アハハハハハハハハ…！！！」 急に新羅は腹を抑えながら笑い出す。

「なつ何がおかしいアル！」

「はーーあ……

そつかあーいくらこの街のなんでも屋でもそこまでの情報は知れ渡つてないんだあー！」

「情報？」

「知つてる？表向きでは物売り屋とかで商売しているけど、裏ではある組織に入り何らかの陰謀を企てていろいろ集団……」

「いや知つてなおその男の話に乗つたか……。」

「はつ？てめえ何言つて……

「まだ分からないの……？
アンタの隣にいる男

珊瑚袈 の組織の一人だつて言つてゐるの……。」

「…………」

「あひ……銀ちや……ん、珊瑚袈つて何アル……か」

銀時の浴衣の裾を掴み問う神楽に対し銀時は「少し黙つていり……」
とだけを告げ隣にただ無言で佇んでいる高梨の方に身体を向ける。

「お前つ……本当に珊瑚袈の……」

「…………。」

「てめえ聞いてんのか……！」

「…………。」

それでも

高梨は口を開こうとはしない。ただ前だけを見つづけ銀時の方に目
を向けようとしない。

「黙つてねえーで何か言つたらどう…」

「時間の無駄でしたね……」

「……！」

新羅へ身体を

向けた！…が既に遅し

新羅は一瞬にして銀時等の前に立ちはだかり

「邪魔です…。」その言葉を聞いた瞬間、彼女からは殺氣

を感じとつた。その目も人間のようではなく……

まるで

鬼のような

そう思つてる間に

銀時と神楽は新羅からどんどん遠く離れていき
約20?ほどの所で地面に
引きずりながら止まつた。

腹からは鋭い痛みが身体中を走り、その時新羅に

蹴り飛ばされた

とこう事に気づいた。

隣で神楽は苦しそうに腹を抑えながら疼くまっていた。

「おーい！—！神楽しつかりしきつー！神楽しつー！」

「あーっ……銀ちゃん

新羅……は新……羅はビーヴ……て……」

「神楽しつ神楽しつー！」神楽もそこでブツンシッ！と電気が切れたように意識が途絶えた。

神楽が抑えていた腹を見ると紅黒い筋がツーッと出来ていた。

多分それは新羅に蹴られた時、新羅の履いていたブーツのヒール部分が神楽の腹に運悪く刺さったのであらう。

「少し我慢してろ……」

銀時は神楽を抱き、

「やつと二人だけの空間になつたわね……。珊瑚袈の将軍さん……。

」

新羅を前にして、足をガクガクと震え上げて、いる高梨
そんな事知らないばかりに新羅は高梨を冷たく殺気が発つ田つきを
し新羅とは思えない程低い声で

「アンタには色々聞きたい事があるからな……。」
そして手を伸ばす

が言葉を聞き
高梨はボロボロの
袖の中から

力チャヤツ

拳銃の引き金を引き

バーンッ！！

「何いひこひの運命つて言ひのかしら……？」

「発砲した。」

「……」

「コソボ事件の時もそつよ！何発も撃発砲されるわ今も発砲されるし……。」

ハアーと一つため息を零しやれやれ……と首を左右に動かす。

この時点でお分かりだろ。新羅は銃弾をひよいつと軽く首を横に傾けかわした。彼女には銃弾が効かないのかただたんにまぐれなのかは知らない。「じうも銃弾バンバンバンバンやられるとねえ……」

興が冷めるつてモンよ……「バシンッ！――！」

右手を刀のように器用に使い高梨の持つている拳銃に一瞬のこととで銃口をスパツ！と切り捨て地へと追いやる。

銃口がなくなつた。それはいわゆる成す術がなくなつたとの同然。高梨はその銃を地面にたたき落としその場を立ち去つとした。

だがそんな隙を空けよつとはさせない新羅は高梨の足に自分の足を駆けさせ地に誘つ。俯せ状態になつた高梨の手首を持ち片腕を空中に誘つ。

「こゝの空間から逃げ出せると想つた…？馬鹿ね…」

高梨から新羅の顔を見ることはまず不可能。なんせ片足を高梨の首につけ、無力体制をとらせられている為。

「じゃあ…変な茶番劇が終わつたことだし。そろそろ始めるとしようか。」

「…時間も無いことだから、早めに終わらせるわね。

私が今からいくつか質問をするからアンタはその質問に問われた事だけを答えればいい…ねつ簡単でしょ…

でも…

アンタに「えられた

解答タイムは一問に付き約20秒。早く答えないと……

グググッ…。

空中へと誘われた片腕を曲がつてはいけない方向に少し動かす。

「アツ！グツヴウ…！」

高梨は喘ぎ声を出す。そして高梨には今の現状は分からぬ。だが腕に

もの凄い痛みが走り、血液の循環が早まる。「まあ自分の腕が壊れたくなかつたらグズグズしてる暇はない…。そういう事…！」

クスッと笑い、この状況を愉しんでるかのよつこ、下に居る人間を人間と思わない目で見る。

「分かつた？」

高梨は縦に顔を振る。

腕を元の指定地に戻す。

「…あつ…銀時貴方も一応関係のある話だからよーく耳澄ませておいてね…。」

「あ、……ああ……」

「え、やあ始めましたー。」

笑顔には裏と表の両方がある（後書き）

「それじゃあ一問目…」

「アンタは…

したの…？」

風が吹く…。

その風は

その場にいた者に教えた

世界は不条理で
不公平だといふことを…。

人の質問になんでも返答できると想つなよ……！

「はつ……？」

風の轉りが新羅の質問に対し反抗した為、新羅が今何を口に出したのか分からず、ただ「はつ？」と声を漏らした。

「聞こえなかつた……？これは銀時……貴方に聞いてるのよ……。

「もつ一度だけ言つわ……。この男になんて依頼されたの……？」

「依頼……？」

「そう……貴方は確かにこの男に何か依頼されたはずよ。それはなに……？」

契約の話？

「巻きますか？」「巻きませんか？」と聞かれた……？それとも人形を買……？

「てめえ何言つて……？」

「？……違うの？」

違うも何も新羅 が言つた言葉に対し銀時は
思考回路が狂う。

(人形……？巻きますか？巻きませんか？)

「じゃあ何て依頼されたの？」

「連續庶民殺人事件」の犯人に家族が殺された……だからその犯人に仇を打つ……。そんな感じの依頼だ……。んでその事件の犯人とやらがおめえだつたつて訳だ。」

そう説明している時に高梨の肩がぴくっと反応した

「家族が殺された……？」

「成る程……。」

グッ！と高梨の髪を上へ持ち顔を新羅の方に向かせた。

「アンタも考えたもんだね……。瑠璃袈の存在が表に割れないが
為に自分の家族を盾にした……か。」

「？」

「銀時……」こいつは家族なんて殺されてない……まして殺してなんかいない……。それに

私は琲瑠袈の連中だけしか手を出していない。

多分こいつは自分の仲間が次々殺られている事は口を封じ、代わりにこいつの

家族が殺された。家族の為にもその仇を討ちたいとのことで貴方達を使った。そういうことでしょう？

高梨……さん。

「つてあつ……一それとれあ……一問田の質問に入るんだけじまあ……。琲瑠袈の将臣さん等……

あんたら琲瑠袈が大挙し大規模なテロ活動を行つてゐるつて情報があるんだけど……」

「……！」

「ねえ……どうなの……？」

高梨は新羅の田を覗き、じとじとしながら

「ああ……じゃあいいや。この話は最後の方でもつ、一度聞いつけとつましょつか？」

本題とこきましょつか。

「これは私達自身に関係してこる」とでもあるか？

(私達自身……?)

「ねえ教えて……」

貴方達はテロ活動と共に

もう一つ何か活動してるわよね……。

それは……何?「

「うう……」

「……これはタイムコリギット制限あるわよ……。早く答えて~。」

腕を曲がつてはいけない方向へと少し動かす。

「じゃあも……私がキーワード言つから!それに伴い言つててくれる?」

「…………ああ……知つ……てるや……お前達……の正体を……な

「何……?」

といつといつと口を開かず。

「お前達……、副隊長の……正体が……。」

「……」

「…………副隊長、翠羽とか言ったか……。あいつは……」

「カウントダウン……0秒前……9……」

「あの女……は……
人間なんかじやない」

「早く……8」

「アリス……になれ……
なかつた……ただ……の」

「……7……」

「ツジヤンク……
(壊れた娘)」

バギッ……！……！

鈍い音　すなわち高梨の腕は曲がってはいけない方向へと折れ曲が
つた。

「アツ　アツ……」

「「めんなさあい…まだ
時間あつたのにねつ…。骨逝つちゃつたねアハハハ！…！」

「うああああああああああああああああ！」

高梨の叫声

そして新羅の狂喜な声が

夜の歌舞伎町中に響き渡る。

「てんめえ…！…！」

銀時は氣絶してぴくりとも動かない神楽を地面に静かに置き、高梨の元へ駆けようと体勢を整え一歩踏み出す。

が 真つ正面に佇む二人の何者かに真剣の先とクナイの先を首の筋に向けられた。

「此処は腹を括つて黙つて見ててくれないですか…？」

真剣を片手に持つは

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

「君は（神楽）その娘とあの眼鏡君の心配したほつがこよ…。
あの男より…ね」

クナイを持つは

翠羽の妹 奥平蒼琉

「くッ……」

言われるがまま、銀時は高梨の元へ行く足を止め、「わ
あつたよ…」

そう告げると同時に
一人も刃を降ろした。

「ああ……新羅はどうするんだ？」「あの男のこと…
……。」

「へえ…

そんな余計な情報まで知ってるんだ…。てことは瑠璃閣内部でもそ
のことを知つていない者はいない…そういうことね…。」「ま
あ…瑠璃閣本部はあんたに聞いてもどうせそんな安々と口を割る
人だとは思つてないから…」

チヤキッ！

鞆から刀を月夜に照らしながら抜き高梨の首元に近づける

「あんたはもう用済み。
死んでいった仲間によろしく頼むわあ 。

次生まれてくる時は

道間違えるなよつて…」

首元に近づけた刀の先を脈に留まらせ因にきつ引き抜こうとした。

しかし

ペペペペペペペ

一つの着信音がなる。
まるでこの状況を

みさからりって鳴らしたかのよつて 。 新羅は刀を持つ手は首元から離さず変わりの手

高梨の折れた

ぶらんぶらんな手を解きそちら側の手で携帯を取る。

その瞬間高梨は逃げよつと試みるが、相変わらず左足は高梨から

離れる気配がせず頭をしつかり踏み付け逃がさんと言わんばかりに力を加えた。

「はい 連沢です。」

「…………ええ……ええ……………わかった。

「いつも手柄は抑えた。」」おれにも援護を。」

ピッ

電源を切り 携帯をパタンと閉じ、高梨の方に皿を下に向けた。

「高梨……。祝、なことにあんたら珊瑚袈のアジト私の部隊が発見したらしいわよ。」 「…………」 内容に寄れば捕縛した

珊瑚袈のある一人の男を強制的に問い合わせたらしきのだが そしたら

すぐに洗いやらうことに吐いたとのこと。

「なんだか皆お繩に着いちゃつたらしいわよ。残念ね。私がアジト」と珊瑚袈内部全員肉塊にしようと思つてたのにほんとに「あーんねん……。」

ハーアーとため息を零し

眉をしたに垂らす。

「留繩に着いちゃったからなあ。アンタだけ殺してもねえ……。
うん……

非常に残念だけどあんたも牢獄入つてもううわ！アンタも運良かつたわね。腕一本だけで済んだことだし」「ハハッ！」と

口では笑っていたが

目は笑つていなかつた。

「まあもつと援護頼むとか先に言いちゃつたし今更悔やんでも駄目か……。」

刀を首元から外し
鞘へ刀を戻す。

ヴゥーン
ヴゥーン！

「あつーきたきた！」

振り向くと

隊士の4～5人が車内からおりてくる。その姿を確認したあと新羅は踏み付けている足を退かせ変わりに両手で高梨を押さえた。

「隊長！　ただいま

局長らが珊瑚袈の連中を繩に着かせたとの御連絡が入りました。」

「「」苦労……。私もたった今珊瑚袈の組織の一人を取り押さえたところ。すぐにこの男を局長の所まで。」

（今さっき……？何嘘こいつてんだコイツ……。）

「それと……そこに散らばっている死体の撤去作業も合わせてようじしく……」

「はつ……」

隊士の一人は高梨を連行するが故高梨の腕を肩に回し車内へと連れていいく。その内の三人は新羅があの時見境なく斬った女の真っ二つになつた塊の撤去作業に移つてゐる。

隊士達には20?先の銀時の姿は闇にカムフラージュされており気がつかれてはいなかつた。

「いつまで座つてんの？　早くこつちに……」

「！」後ろを振り向くと

いつのまにか新羅は新ハを担ぎ暗い夜道を歩いていた。

「今日は迷惑をかけた。送つていくわよ……。」

「それに……」

暗い公道の真ん中には

不自然と車が一台明かりを照らし止まつていた。

「それに……」

まだ話したいこともあるからね……。」

そう言つと、後部座席のドアに手をかけ開けると、「どうぞ……」

と薄い笑みで車内に向かい入れる。

銀時は無言のまま、

神楽を担ぎ車内へと入つていいく。その後ろに続き新羅も車内に入り、

パタン と近所迷惑にならないように静かにドアを閉めた。

その車は

万事屋銀ちゃん宅へ

目的地へと 静かに

車を走らせた 。

人の質問になんでも返答できると思つなよーー！（後書き）

テスト終わったのでこれからなんとか投稿ジャンジャンできるよつ
になりました！－かも…？

車の中では騒いでた方が酔いにへい

車を走らせ

約6分

車内は 車に乗った当初から息苦しいふいんきに見回れてい
た。

一言も口を聞かず
後部座席に乗っている
両者互いの窓の外を
夜中で何も見えない

夜の道をじーっと

見つめていた。

聞こえるのは

車の静かなエンジン音

両者の真ん中で肩を近づけスゥースゥーと眠る神楽と新ハの寝息

だけ

「怒ってる?」

先に口を開いたのは

新羅。

暗い夜の小路を見つめながら銀時に問う。

「.....。

「まあ連れを傷つけられたんだもの怒らないはずないわよ
ね.....。

「…………。」

またしばらくの間沈黙の時が始まる。

「…………なあ」

かと思われたが

銀時は次に口を開く。

「何?」

「奥平達は……?」

「翡翠達のこと……まあね……もうアジトにこいつたんじゃない?」

「…………そうか……。」

「もっと違ひの事聞くかと思つてた…………。」

「あ……?」

「気にならないの……? なんで私がテレビで報道されてまで事件を発展させたか。とか……。」

銀時は少し肩に力をいれると一気に肩の力を抜く。

「んなこと聞いたつて…

俺達には何も得することなんてねえしな……。」

そんな返答に一瞬目を丸くした。

「へえ……存外この街にもそん氣の利く人もいるのね……。

じゃあわ……

これだつたら氣になつたんじゃない……？

契約の話

巻きますか？

巻きませんか？

つてこいつ」と…。

「…………」

田線を銀時にじらうつと向けると銀時はぴくつと肩を鳴らす。

「まあ……いくらなんでもあんな質問聞いたら喫煙問湧かない人は少ないだろうね…。」

窓から視線を外し、

正面に身体を向き直すと腕と脚を組む。

「てめえ……。

一体何がしてえ……。

この街に……何しに来た。」

銀時も窓から視線を外し 両者よつむく面と面を合わせた。

銀時の真剣な眼差しを
しばらく見るとニヤツ と口を横に広げる。

スツ と銀時の後ろを
指を差す。

「着いたわよ。万事屋銀ちゃん宅に……。」

「！」

後ろを振り向くと

いつのまにか

「万事屋銀ちゃん」

と書かれた看板のすぐ下の公道に 車が止まっていた。

「両方はキツイでしょ

……一人持つ……？」

「いい……。」

即答し、神楽と新八を自分の肩に担ぎ、外へ出る。

「 もう……。

『 気をつけてね……。』

「 」

無言のまま礼を言わず、 階段を一段上がった途端

「 明日の2時、

てに~ずで待つてるわ。勿論その一人も連れてきてね……。明日全て
話すわ。

契約の話も… 人形の話も…

そして

薔薇乙女

(ローゼンメイデン) のことも…

「 ? … ローゼンメ…」

「 翠羽と蒼琉の皿口紹介を合わせてね… !

銀時の言葉を搔き消すように言つた。そして神楽へと視線を動かす。

「 神楽の容態は明日になれば治つてるはずよ…なんせ夜兎だから治癒力も早いだろしね…。」 「 ……つ…てめえなんでそ

… ! !

人差し指を唇の前にたてシーツと銀時の声を消す。

「 もう夜中の3時よ…でかい声出さないで…近所迷惑でしょ !

詳しい事は明日教えるから今日はこれで…

やよひなじ…

笑みを零しながら
手を一往復振ると
パタン！とドアを閉め

車は真っ暗闇の行路を
進んで行きやがて姿形が見えなくなつた。

「あの女… 一体…」

やつぽつじとぼくと

階段を上がつていき、

銀時等も部屋の中へ入る。

「よひじいのですか…。あんな男に 契約の話などして…。
運転手はバック//マーから新羅の顔を伺つ。

「言わざる終えないぢやない。あんな光景見せつけたんだ
し…。」

後部座席に腕、脚を組み座り黒一色に染まる
窓の外を見つめながら語り

「ですが……ローゼンメイデンはともかくまさか貴方の……。」

「冗談よして……。そこまで私もべらべら口呑く言つ女じやないわ
よ。」

「なら良いのですが……程度といつものを知つたほうがよろしいかと
……。」

「分かつてゐる……。」

「なら何故そこまであの男に執着心を持つておられ……。」

「大物が釣れたんだよ……。」

「ほほあ……大物とは?」

「あの男、……」

「白夜叉よ、……」

バックミラーの中に写る運転手を見ると、運転手の顔つきが変わる。

「…………白夜叉……」

何処にいるかと思われましたがまさか「の歌舞伎町（街）に。では計画は…………。」

「実行する…………。」

必ず「この街にいるはずだから……」

「健闘を祈つております。」

「まあ……」

早くアジトに向かって……。土方に罵声浴びせられるの嫌だから……。」

「御意…………。」

異様に紅く染まる月と共に

数ある謎に満ちたまま……

もい。

返りもしないなー……。

車の中では騒いでた方が酔いにへい（後書き）

次はいきなり
てに一すに入った新羅達と銀時等の会話になります！

「あのー……

ええつと……？

「……注文……は？。」

「ええつ……とね……

「ジャンボエビフライ定食」「スペシャルジャンボパフュ」に
「ジャンボ坦々麺」「ジャンボステーキセツト」「ジャンボクリームパスタ」「ジャン
ボカレーライス激辛味」「ジャンボポークカツ」を下さい!」

「あ……はい……

かし……まりました。」

店員は田を泳がせながら注文書に次々メニューを書いていくと、
後ずさりをするように去つていった。

そりゃそりゃ。

銀時等が座つているテーブルの上には食べ終わった何十皿もの皿が段々積まれておりその大半が銀時と神楽によつて軽々と平らげられていた。

「ホントに適当に頼んじゃつたけど良いの？」

メニューリストをパタンと閉じると、田の前で田の上のつてあるタココスパゲティー

やらなんやらをまるで獣のように食いつ銀時に食べく。

「ああ……じゃあんじゃあん注文ひり……」

「ちよつと！銀さん！ジャンジャン！つてこれみんな新羅さんの奢りなんですよ……自分が奢つてゐみたいに言わないでくださいよ！」

「眼鏡五月蠅いネ！

おみやえもせつて食べる、ヨロシ……新羅が良いつて言つてんだからそりえで良いあるじやないアルか……」

ガツガツ！と

カツ丼をブラックホール状態の腹へ入れていく。

「神楽ちゃんもだよ……少しは遠慮つてことも考へ……」

「良いわよ！……今日は

文字通り私の奢りだし！

思つ存分食していく……」

「よしつー！神楽！！

今日はこここの奢りだ！！食べ放題！！食えるだけ食つてその腹が悲鳴あげるまで食いまぐれ！！！」

「ねづネー！」

新ハの注意を余所に一人の猛獸は再び皿の上の物に目掛けて口を開けた。

「ちよ…………

新羅さん良いんですか？」こんなに……。」

「良いわよ良いわよー昨日の件で貴方達には色々迷惑かけたし、こんなで許してもらえるなんて思っていないけど、少しでも罪滅ぼしになればと思つて……。」

新羅は少し顔を俯かせながら言つ。だがじばりくして顔をあげると今度は新ハに向け頭を下げる。

「本つ当に申し訳ありませんー昨日は珊瑚袈の件のコトもありあの男だけじゃなく新ハさん今まで手を出してしまつて……。」

「昨日の件……確かに昨日は災難な日にあった。新羅に氣絶させられ、何より氣絶させられる瞬間に「嫌いよ」などと言われたのだから。

「いっ……いえいえ！ そんな頭下げないでくださいよ……わせつ……頭上げて下さい！」

言われるがまま、新羅は頭を上げる。

「確かに昨日は色々災難な口でしたが、僕もつ氣にしてませんから！ 対外の事は一、二日で忘れてしますし……」

「カツ！ と白く輝る

歯を見せ笑うと

新羅も少し微笑む。

「本当にすみません……。」

「神楽つ！ 貴方には身体に傷を負わしてしまった！

最悪の場合血管に穴が空く可能性も確率的に低くはなかつた！ 本当にじめんなさい……！」

テーブルレスレスレまで額を近づけ頭を下げる。

「んー……よー……よおー……べえつに氣、にしてな、いからあー」

一方の神楽は、のんきに右手に巨大フランクフルト、左手にローストビーフを口に頬張り、その半分が何言つているのかは聞きとれなかつたがとにかく神楽は昨日のことなんも気にしていないようだ。

鶏も三歩歩けば忘れる……

とか言うが人間（夜鬼）も

一日立てば忘れるものであるのだろうか……？

「で…でも神楽つ？貴方

お腹に私のヒール刺さつた…」

「あれえだあつたらみょう治つだアルよ！私

夜兔族だから治癒力

ハンパあじやないネつ！…！」

フランクフルトを皿の上に不安定ながら置き、自分の腹を新羅に見せる…。

そこには、昨日のことが嘘だつたかのように傷一つのないただの夜兔特色的透き通るような白い肌が見えた。「ちょっと神楽ちゃん！食事中に何してんの！-レディーなんだしそれに他のお客様さんにも見られ…………あれ？」

どうも珍しい。

いつもなら、子供連れの親子やら、しゃらぎヤルやらメンズやら少なくとも5席ほど埋まってるはずのにてこづが妙な事に今日は銀時達だけの話し声しか聞こえないのだ。まるで貸し切り状態。

「いや貸し切つてんだけど？」

「はつ？」

突然新羅が口挟む。

それに「はつ？」と言葉をこぼす。

「いやだから貸し切り状態じゃなくて貸し切つてんのー今日は…」

「ええええええええええええ！」一同騒然！驚く銀時！
だが銀時以外神楽と新八は席から立つ。

「ちよつー貸し切りつてマジのマジのアルか！？」

「本当にですか新羅さん！」

「ええ…マジのマジのマジのマジですよ！」

「」口ごと笑う。

「でつでも……じつやつて此処の店…
貸しきつたんですか？」

それに…

…わざわざびりじ…て？」「

「フフフ…
新八さんも鈍いわねえーそんな質問しなくても普通に考えれば分か
る事じゃない？」

「えつ…？」

笑う顔とは裏腹、「ゴーッゴー…と背中から殺氣が放つ。頭上にはど
す黒いオーラが聳え立つ
親指と人差し指を丸い輪を作り、さつきよつも
無邪氣に笑う。

「金よ…。」 金よ… 金よ… 金よ金よ…

「金よ……」といつゝ一文字の言葉が銀時達の頭を木霊するかのように過ぎ去る。

「金あげるから此処貸し切つさせて」つてこの店の主人に頼んだらあつたり承諾してくれたのよ○○／＼いやあ～金の勢力つて凄いわよね！まるで人間が駒のように動くんだもの…。」

（何ぞりげにやべえ事言つてんの）いつ！…でかこの状況で顔文字使う意味あるのか？）

銀時の心の叫びはさておき新ハはコホンつーとわざと咳ばらいする。

「ええつと…まつ…まあ
とにかく新羅さんには億万長者つて事ですかね…？
あははあ…。」

「億万長者なんて勿体ないお言葉。貸し切りに出した金は全て局長の銀行に入つてたお金を盗んできたものよー（笑笑）手帳を鞄から取つて口座番号適当に押して後は金を降ろすだけ…。ねつ…簡単でしょ？」

「いや簡単でしょ！
つて アンタ何やつてんですか！… アンタそれもうモノホンの詐欺でしょーがあああ…！」

新ハの声は店内全域に響くだが周りからは冷たい視線を感じない。そう今此処は貸し切りしてて人がいないからだ。

「詐欺なんてとんでもないとんでもない！勿論局長に承諾得たわよ…

「お妙さんの働いてるキャバ嬢が今破綻の危機に陥つてゐるらしいですよ。キャバ嬢……いやお妙さんの為にも局長の口座に入つてある金お妙さんに費やしてあげたらどうですか？」つて言つたら、「お妙さんが居るからこそ我が命は今こうしてこの街に存在している」なんて言つたから

「じゃあ私がお妙さんに渡していくから、手帳私に預けてくれませんか？」

はい成立！！

そこからは貴方達のご想像にお任せします!!

ズズツ
ヒホジトナーレーを噛ると、ハアカーレーと一息つく。

「雑だけど大方こんなもんよ！理解出来たかしら？」

「理解つてもんじゃねえだろうがああ――

まあ近藤さんのことだから騙されるのは丸見えだけど、アンタただ金だまくらかして金巻き上げてるだけじゃねえかああー！それが警察のすることですかーそれで警察ですかー！」

「警察だつて生きるに故はこういう事も大切なのよ！人を騙して騙して生きる！それが人間つてもんじやない？」

「全ての人間がそんな汚い人生歩むと思うなよ！――！」

まあまあ…局長には言わないでね！あの人に必死にしてお姫さんの為に金費やしている最中だからそのうちまた大金が手に入る日もそう遠くはないからねえ…」目を輝かせながら窓の外の景色を伺つ。

（駄目だ… この人と話してると自分の頭まで狂いそう…。）

新八 殴北を氣した。自分の頭を狂わせないために

「ていうか、新羅さん。
今日翠羽さん来るんじゃなかつたんですか？それとその友達みたい
な？」

「友達じゃなくて

翠羽の妹さん！そろそろ来ると思つわよ！
んまあ…あの娘達の事だから入り口から入つて来るとは思わないけ
ど…」

ボソツと独り言を言つ。

だが新八等の耳に

はつきり聞こえた。

「おい…どういう事だ。入り口から入つて来るとは思わないって
…。」

銀時は食べるのをやめ、新羅の顔を見る。

新羅は苦笑いをし

「いや…だからそのまんまの意…」

「遅くなつたです、うー」。

はいこれお土…産…」

「…だから嫌だつて言つたんだよ翠羽…。もひづき集まつてゐ
と思つからつて…。」

パチつ 目が合つ。

パチつ 顔を斜め？の

一重ガラス窓の方に。

パチつ あれ? おかしいな…。なんで 人間がガラス窓から…?
?あれ上から吊されている…?いやワイヤーなんて見当たらぬいし、
第一風吹いてるのに身体
揺れてないし…?

まつ…まわか…!!

「いつ…いやあなのね!先に言おうとは思つたんだけビ…いつタイ
ミングが無くて……ね。」

焦る新羅。
ドン引き顔の万事屋一家
そして

「ここの娘達、1?くらいの鏡からなら何処からでも出入り出来る
の…よー。」

翠羽ともう一人の女性、蒼琉が鏡の中から上半身だけがひょこつ
と出でていた。

「あああああああああ…!!」

時計の針は午後3時
を回る。

楽しい愉しいおやつタイムは

絶叫の日和となつた

。

女の涙に男は弱い Part 1 (後書き)

銀) なあなあおい…

神) 何アルか…?

銀) 今回なんで主人公ほっぽいて眼鏡と連沢の会話が長いわけ?「らあー?」

神) 確かにそうアル! なんで私あんな食い意地張らなきゃならないネ! ! もつと謎ディみたいなお嬢様風に食わせてもいいじゃないアルか! !

銀) いやお前は謎ディには向いてない。ビリせならマジコ系でタラバガニを殻丸ごと食つて後から口の中血の味になり一の蟹本店にクレームを言う方がお似合いだ!

神) てんめえ! ! ! 私を

一体なんだと思つてるアルがああああー! ! ! !

銀・亜麻音)

食べて寝て食べて寝て

うこしてまた食べて寝る暇人女。

神) それはてめえらだろおがああああー! !

銀・亜麻音) ぎゅああああああああああー! ! ! !

良い子はバランスの取れた生活をしようね

チーン

新) あの子...僕は?

神楽 呆然。

新八 嘞然。

銀時 失神。

「ちょっと……銀時！大丈夫？口から泡吹いてる……てか魂半分出でる……！」

新羅は開いた口から半分出でている魂を拳を魂に向けて無理矢理口の中に押し込む。

「ウッ！」

なんとか一命を取り留めた。白田から死んだ魚のような田に戻り、一応一安心？

「てか、翠羽達もいつまで鏡ん中から様子伺つてんのよー…さつさと降りてきなさい！」

「こっちへ来い」と手招きをする。

その様子を鏡の中から

伺つてた翠羽と蒼琉はこくりと頷くと、天使が舞い降りるかのよう

に鏡の中からスルッと出て 隣のテーブルに着地する

「ふうー間に合つたですぅ！あつこれお土産つ！適当に食べて！」

「それはさつき聞いたつーてかちょっと待てえええ！！！『まかそうつたつてそつはいかんぞ！！！』とですかー人間が窓から出て来るつて！」

新八の鋭い言葉に翠羽と蒼琉は冷汗をかき、焦りながら

「い……いやいや何の事かなー？そこの窓開いてたじやん？気付かなかつたあ？私達あつちの方から大砲に

吹っ飛ばされて此処まで来たんです！ね……ねつ蒼琉！」

「そ……うそう！今歌舞伎町で主催している「大砲で何処まで飛べるか大会」やつているからねえ！僕達も一応参加してこりやつてきたんだよー？」

「何処がああーおもくそ窓のなかから上半身出てたでしょーがあああー！」

「い……いや？だからそれは……」

「翠羽！蒼琉！

もつ良いわよ……

……全て……この人達に話すつもりだつたから……。」

ガムシロップの蓋を器用に開けてホットコーヒーの中に入れると
とろーっと吸い込まれるようにコーヒーの中に入る。

「ちよつ！新羅！全て話すつて何を……」

「おー……窓から出入り出来る事とその薔薇乙女ローゼンメイデンとかいう奴と何か関係あるのか……？」

「…………えつ？」「

キヨトンとした開いた口が塞がらない翠羽。

「今……ローゼ……ンメイテン……つて……」

「察しが良いじゃないの？ そりや……この娘達はローゼ……」

「バツ……！」

「ちょっと！ 新羅！」

「ミーディアムでも何でもない奴に何教えてるですか……！」のぼんくら共ただのド素人ですよ！ ド・素・人！ …」

胸倉を掴み、前後に激しく振る！ ！ それでも新羅は顔色一つ変えずに「ミーディアムになつた人も全員素人でしょ？」

「だからって……」

「ちょっと待つて下さい！ ！ 何なんですか！ さつきからローゼンメイデンとかミーディアムとか意味わからない発言ばっかして！ ！」

新八の言つ通り、この小説を見ていただいている方々も
「はつ？ 何ローゼンメイデンって？ ミーディアムって何？ ミュージアムの間違いじゃなくて？ 」

みたいな

疑問を抱いてる方々も多々おられることがどう。ナイスだよ！ …

眼鏡つ？ ！

「そこ新八で良くないつ……つーか眼鏡の後に？ つけるのやめてつ！ ！ 腹立つから！ ！ …」

ボソッ……

新八のシシコミなんて読者は興味ないんだよ。

さて次へGO

「あつーそつか！」

てか昨日あつたことから話した方が話の辻合が繋がるかもね…。
あなたたち昨日は氣絶してたから話の読みがわからないのも無理もないし…。」

「昨日…？」「お教えしましょつ…。昨日あつたことを…全部。」

「そして……翠羽…。早くこの手を離しなさい…。」

新羅は昨日あつたことを新八等が氣絶した後にあつた出来事を語り始めた。

珊瑚袈の存在

高梨の本性・そして

本来の目的の事も…

「大体御理解頂けた…？結構解りやすく教えたと思うんだけど…」
さすがに刺激は強すぎたか…？テロ活動をしている奴がまたも仲間の
仇討ちの為ごとに自分等の命を利用したのだから…
…と…そう思われたが

「じゃつ…じゃあ新羅さんは人殺しとかそんなんじゃなくそのテロ
活動している琲瑠袈つて組織の人間を潰そうとしましたが、琲瑠袈
は表舞台には名が出てておらずさらには庶民という設定で表で生き
てきたから

「連續庶民殺人事件」なんて変な事件で呼び名されてしまい挙げ句
新羅さんがまるで犯人扱いになつてしまつたと…そういうことです
か？」

「えつ…ええまあ…。」

「良かつたあー。新羅さんが本当に人殺しじゃなくて…！」自分
の胸に手を当てるど、ふうーと息をつく。

「そうアルー！新羅は罪のない人間を斬るような馬鹿な女じやない
ネ！！！」

新羅の顔を見ると華のある笑顔を新羅に向けた。
新羅は啞然とした顔で三人の顔を見る。

（なんで……？普通こんなこと言われたら誰だつて……）

「誰だつて落ち込むはず……なんて思つんじやねえよ。」

「……」

「……こいつらはそんなもんでも心曲げたり落ち込む程大層な奴らじやねえよ。」

「…………」

新羅の思いを悟るよう前に先に銀時はパフュームに夢中になりながらも言ひづ。

「そつ……。確かに……。」

「そつ言われてみればそうかもしね……。」何やらがみがみがみがみと小さい子供のように言い争つ「一人を見て、微笑んでいふと、銀時は何かを思い出したらしく新羅の顔を直視する。

「連沢！だつたら

なんでもめえは組織内部の人間だけじゃなく表舞台で珊瑚架に依頼した人間まで手に掛けている！」

「……」争い事をやめ、新羅に顔を向ける神楽と新ハ。

「ピン一ポン！

実はそこが今回重要な役割を持つローザンメイデンが出てくるよ

「！」

ピースを作り、ワインクをバチッ と決めるといピースを作った右手でフォークを持ち皿の上に盛つてあるスペゲティーをフォークに360巻き回しそれを口にパクッと入れる。

「……まあ手始めにローゼンメイテンとは何か……？」

まあ

ローゼンメイテンってのは要するに

人間じゃない……。

「……

人間じゃない……？

「……！」

えつ……待つままあ……ちょっとー！」

「簡潔に言えば

ローゼンメイテンってのは実は

・・

人形なのよ……」

「はいっ？」

「まさつき翠羽に邪魔されたから言ひタイミング削がれたけど
私の後ろにいる

翠羽と蒼琉……

ローゼンマイテン
なものなんで……

正確に言えば

ローゼンマイテン
第3ドール 翠星石
と

ローゼンマイテン
第4ドール 蒼星石

これがこの娘達の
本当の名……！

二人ともこの場で自己紹介を……」

「…私が真選組四番隊副隊長

奥平 翠羽

んで

ローゼンマイテン

第3ドールの 翠星石 です…

奥平 蒼琉 また

「そして僕が翠羽の妹

ローゼンマイテン

第4ドール 蒼星石

みるしく…

「自己紹介は自己紹介だけ…

さすがに…

テーブルの上で自己紹介は無いでしょ…」

早めじやないけど、自分では早めに更新した感じがするww

そういえば一つのまにお氣に入り登録が増えてた!
どうもありがとうございます。・。)

お気に入り登録や感想等お待ちしてますww

人形には感情つてもんがあるー?じゃあ髪が伸びる人形つて…

「にっににー…………に

人形!ー!ー!ー!

三人は目を丸くする。

「ええ……正真正銘

人形よ…

でもこんなことで驚いていたんじゃ話進まないから質問は後で受け付けるわ…

さつきの続…」

「おいおい…ちょっと待てよ…人形なんて言つて脅してるつもりなんか知らねえが…そいつらが人形だつて証明出来ることあんのか…?」

「本拠ならあるけど…

翠羽・蒼琉腕を……。」

何を言い出すかと思えば、腕などとほざきだす新羅の顔を嘲笑うかのよう見下す銀時。

翠羽は制服の袖を

蒼琉は着物の袖を

「あまり見せたくはなかつたんですけど…」

嫌々ながら捲る。

「よーへ田を擦つて見てみなさいよ。この娘達が人形だつて証拠をね……」

「…………」「…………」「…………」「…………」

わざわざ田を擦らんでも一日見ればわかる。

翠羽と蒼琉の腕は普通の人間とは異なる腕をしていた。人間の腕は関節というものがありそれがあるからこそ自由に腕を動かすことが出来る。だが翠羽達の腕は球体関節。普通の人間では有り得ない。

「見ての通り。私達人間とは違つ腕をしてるでしょ？他にもこの娘達の膝とかも人間とは違つ形をしている…………

「ごめんなさいね二人とも…。わざわざ。」

「大丈夫です…。」翠羽は一言申し…

蒼琉は無言のまま縁を戻す。

「脅してゐつもりなんてサラサラないわよ…ただ私は本当の事を話しだだけ…本拠まで根拠だつてあるのだから信じてくれるわよね？」

「…………」

無論返す言葉がない。

「それじゃあ…さつきの続きといきましょうか…。

ローゼンメイデンってのはさつきも言つたとおり人形…だけどこの娘達が今

こうやつて生きていくてるのは 人間がこの娘達の首の裏にある鍵

穴にローゼンマイデンを用意めさせた専用の鍵を入れ巻いたから。

それは
のちの“契約”に繋がる」

」

「契約？」

「そう…契約とはローゼンマイデンとその人間がローゼンマイデンが
嵌めている薔薇の指輪に
キスすることで契約は成立する。契約をした者をローゼンマイデ
ンの中では
ミーディアム
契約者
と呼ぶ。

契約をすればその人間とローゼンマイデンは薔薇の契約を結ぶこと
となる…だけど結べばそれ以上に代償というのも持つこととなる。
ローゼンマイデンは契約をすればより強力な力を得る。その得る力
の原力は元は契約を結んだ人間の力。ローゼンマイデンが力を使え
ば契約した人間の力は消耗する。より強い力を使えばその人間は…
…死へのカウントダウンが始まる。」

「力を使うつたって…普段…いつもそんな戦争みてえな」とするこ
とでもあんのか?」「そう……言い忘れてたわ。

これは…ローゼンマイデンにとつて一番大事なこと…」

「大事…?」「ええ…ローゼンマイデンにはね…使命があるの。
その使命って言つのは

「アリスを目指すこと」

「アリス…？ なんだそれ…？」

「アリス…どんな人形の中でも気高くてどんな人形よりも美しくて一点の汚れがない。そのアリスは必ずしも人形の中では有り得る存在……だけどそのアリスになれなかつた人形

それがローゼンメイデン

「！ ！ ！ ！」

「ローゼンメイデンは第一ドールから第七ドールまでいて皆それは姉妹。皆それぞれ仲の良い姉妹…。だけどローゼンメイデンに『えられた使命…それは…

姉妹同士で戦い

一人生き残つた人形がアリスとなること…

それが“アリスゲーム”

「…アリスゲーム！？」

「アリスゲームの勝者こそが本当のアリスになれる

「だが…何の為に…！」

アリスになる…！アリスになつて何になるんだ！」

「それは……」

「お父様に会うことです……」

「翠羽！」

新羅が言いかけた時に翠羽は自ら口を開く。

「私達を造った人の顔は

姉妹全員誰も覚えてないです……。ただわかるのは

“お父様”という名前だけ。アリスになれば……お父様に会えるです。

「だけど……確かに……！」

お父様に会いたいですけど！そんものはおかしいです！仲の良い姉妹で戦うなんて……ましてや蒼星……蒼琉と戦うなんて絶対できません！だから……私達はアリスゲームをしないで……お父様に会う方法を考えてるです！

でも……私達以外のドールは目覚めてるのか……誰と契約をしているのか！……他のドール達が私達の知らない場所でアリスゲームを始めているかもしれない……それもわからない……

もう私は……嫌なんです……！姉妹が……戦う姿を見るのは……

「お前等……姉妹で戦ったことあるのか……？」

「……一度だけ……ですぅ。七体全員で……」

でも結果…決着は尽かず、私達はある馬鹿ウサギにより…そこで深い眠りに

つきました…。

気付いた時にはもう40年の時が過ぎていたです。

姉妹同士が会うなんて滅多にないこと…

私と蒼琉が今こうして会えたのは、本当に偶然に過ぎないです…。

ですが…偶然にも

この街でもう一人のローゼンマイデン…私達の姉妹に会いました。

第六ドール雛苺ひなぐちに出会いました。

腕はもぎ取られ

顔半分 脣が入つてて

片方の脚が無い状態で

惨い様で

この歌舞伎町の

ゴミ捨て場で

「40年ぶりの再会を果たしました…」

人形には感情つてもんがあるー?じゃあ髪が伸びる人形つて…（後書き）

ローゼンメイデンファンの皆さん！深くお詫び申し上げます！

私自身の勝手な想像を広げた挙げ句、雛姫を…あんな惨い姿で出番に出してしまいました。

前々からローゼンメイデンキャラ崩壊していますが…そういうことはスルーでよろしくお願いします！！

* 感想・お気に入り登録よろしくお願いします～～

クラスのムードメーカーの長所は笑顔

「…その…

第六ドール…って言'う

人形はなんで…

この街の歌舞伎町に捨てられてたんですか…？…？ まさかそのミードイアムって言う人に…？？」

「違います…。

「…からは…新羅に話を進めてもらひつと良いです…。翠羽は

…もう…」

俯いた顔を上げることなく新羅にバトルタッチをする。

「やつぱ…同じローゼンマイデン…いや姉妹が一人居なくなつたんだもの…。無理もないわ…。」

新羅も翠羽に顔を向けたがすぐに前に身体を向け、話を進める。

「ローゼンマイデン…ってのはね…自分の力だけではアリスゲーム…他のドール達に勝つことは出来ないの。もしそのドールがより強い人間と契約交わしたのならば尚更勝ち目はない。だからローゼンマイデンは数々の人間と契約を交わしては…切りまた新たな人間と契約しては切つての繰り返しをし、より強いミードイアムを探し回つた。そのせいか…一時期

江戸ではローゼンマイデンの噂が流れ始めた。さすがにローゼンメ

イデント

言えど、「動く人形」人形
なのに食べ物を食べる。寝る…笑う。ほとんど人間と何の変わらない。
い。
だけど、

ある人間はこう考えた。

「動く人形を売れば、
ローゼンマイデン

大金が手に入る。

持つてすれば俺達は

億万長者」だと。……」

情報が回ってきたのはその一週間後……。私達は急いで全ての
ローゼンマイデンを探しだし話した。

「このままじゃローゼンマイデンは人間達に売買される
つて……。

だけどある人形だけが
一体の人形だけが

その場にいなかつた。」

「それが第六ドールつてやつか?」

「ええ……」

新羅は小さく頷く。

「まさか……って

最悪な事まで想定して私達は探した…。ちょうどその時、私達はこの街に来たばかりで真選組入つて早々だつたから、あまりこの街のルートが知らなくてね…。

この街にまさか居ないだうつて思いながらもまるで迷路のような街をさ迷つて探してた。でもある「ゴミ捨て場に差し掛かつた時

ある服が目に付いた。ピンクのフリフリドレス。あの娘はフリフリが大好きだつたし……話によれば

ピンクが姉妹一大好きだつたらしいから。

私あまり雑莓をよく知らないけど……

頭に顔よりはるかに

デカいリボン付けて
いつも笑つてたんだとよ…。

でも……私達が会つた雑莓はもう雑莓じゃなかつた。

原形が留まつていなかつた 惨たらしい様…。

アリスゲームをやつたからこんな事になつたのか…?つて私は思つたから

ローゼンメイデンに

聞いた。だけど

聞いた話では、最初

ローゼンメイデンを買収

する噂が私達の耳に届いていた時に私達が行動した時にはもう既に遅し、 ターゲットは第六ドール雛苺に絞られていた……。

あのまだ幼くて鈍い

馬鹿人形だから

まんまとそいつらに捕まっちゃつたらしい。

雛苺はその時でさえ、

自分にフラグが立つていた事に気付いてなかつただろうしね……。

そこで売買するもの達が集まつたらしくんだけど どうも買収する連中が、雛苺を巡つて揉めたらしくそのうちどつかの餓鬼みたいに雛苺の片方の腕を掴んで引っ張り合いつこしてたんだって……。人形だからって

痛みが感じない訳じゃないし尋常じゃない痛みが身体中に走つただろつけど……。 ついには

片方の腕

片方の脚

とれちゃつたんだって……

自分の姿を見て、痛みよりも先に

ショックを受けた雛苺はそのまま氣絶……。

でもその売買側の人間達は

「死んじやつた

とでも

思つちやつたんじやない?

いらなくなつた道具は
捨てるのが一般的。

そのまま

この街 の「捨て場」に

普通に

捨てた。

離^ハが目覚めた時

自分の醜い姿を見て言葉を失つたでしょ^ウ。

お父様からもらつた

ボディーが見るも無残なガラクタ（「アリ」となつて^{シテ}）。

そして……腕と脚がとれた痛み……。悲しみ……。

その痛みと

絶望……

哀愁に満ちた情を感じながら

雛苺は……。

その直後よ……

私達が雛苺を見つけたのは、

雛苺からは

ローザミスティカが

身体から出てきていた

だから

この娘は

一生目覚める事はない。

アリストゲームにはもう

参加しなくて良いのだって……

……。

「ローザ……？」

「ローザミスティカ…
人間でいう“心臓”

ローゼンメイデンは
ローザミスティカという

光輪を伴った結晶があるから生きていられる。言い忘れてたけど、ローゼンメイデンがアリスゲームに勝利するためには、七体の身体の中にあるローザミスティカを全て集めれば、その人形こそがアリスになれる。グロい言い方だと姉妹同士が七個の心臓を奪う合うゲームってこと！」

「そんなん…。姉妹同士で戦うなんて……

それに雛苺うつていう
お人形…。

苦しみながら死んでしまつなんて…」

「人形に死…はないです…

ローザミスティカを奪われれば確かに私達はただのガラクタに過ぎなくなるですう…
でもガラクタになつたとしてもアリスゲームが終わるのなら……私は……」

翠羽の言葉に言葉を失う万事屋一同。

「……私達は
その売買人が誰なのか。

その組織は一体何処の組の連中なのか……

知るのにそう

時間は掛からなかつた。

その組織つてのが

雛苺を手に掛けた連中つてのが

珊瑚袈だつたから。」

クラスのムードメーカーの長所は笑顔（後書き）

銀) 更新遅つせえよ!!!!!!

どんな天才でも人の考へることまではわからない

「だから…ミーディアム
以外私達を知る人間は
殺らなければならなかつたです…もう…人間共の手で姉妹が消えて
く姿なんて見たくもないですから…。
あの高梨つていう男もローゼンマイデンを知る奴です…あの時、
殺しておけば…。」

琲瑠袈は

テロ活動もしている連中
ですから、私達が
ローゼンマイデンを知る
琲瑠袈を
消したとしても、

他人から見れば、

テロ活動を行う組織を潰した…。私達は善意と見做されるだけ…。
どちらにせよ一石二鳥です…。幕府にとつても私達からにとつても
邪魔な組織が消えたんですから…。」

「だが…なんでそこに連沢が関係している?…そいつはローゼンマイ
デンじゃないんだろ…?…」
「…」
「…」

琲瑠袈に関係していない

女まで手をかけた。」

「私は確かにローゼン
マイデンじゃないわよ。

だけど、

もし翠羽達が

下手に琲瑠袈に近付いて

連中を潰そうとしたら逆に奴らにローゼンマイデンだつて顔が割れ
ちゃうじゃない。そうしたら多分翠羽達は雑莓と同じ道を辿る事に
なつていたでしょ。

だから代わりに私があいつらに近付いて潰そつとした。だけど変な
事件の犯人に仕立て上げられたりで…。

だけど、噂は琲瑠袈だけ
じゃなく本当極僅かな善良な市民にまで流れ込んでいた。悪いと思
つた。

けど…ミーティアム以外知られてはいけない…。

そして昨日の女はただの
市民だつたけど
ローゼンマイデンを
知つていた。

だから

……消した

「それは……つまつ……。」

「私達が濡れ衣を着させてしまった……。」

簡単に言えばそういうことになる。無罪を着させてしまった……ローゼンメイテン（私達）のせいだ。

「そんな……私は当然のことをしただけよ！……だつて私……翠羽のミートイアムじやない」

「…………へつ？」

あどけない顔の三人。

頭にクエスチョンマークを浮かばせて「ん？」と可愛く首を傾げる
新羅。

「あれ？教えてなかつた？私翠羽の（ミー・ティ・アム）契約者だけど

「……！」

「…………ええええええ…………！」

「ほらこれが契約の証」

右手の甲を見せるとい、そこには薔薇の指輪を親指に嵌めていた。

「契約すれば契約した人間も同じ指輪を嵌めることになるのがルール。翠羽にも同じ薔薇の指輪が嵌まっているわよ」

「まつ……眞面ですか……！新羅さんが契約者だったなんて……。」

「えつ……何？もしかして嫉妬？」

新ハさん……私と契約したかつたーとか？」

おちょくつて言う新羅に、顔が梅干しみみたいに赤くなり

「ちつ違います！ただ僕は……」

「童貞気持ち悪いアル……。しばらく私に話し掛けないでくれるアルか……。」

「そこ」マジ退くのやめてえ
ええ……！「ピロロロロロロ

一つの着信音がなる。

「私のだ……」

新羅は真選組制服のポケットから携帯を取り出す。携帯は綺麗にデコレーションされており、大量のキーホルダー等がジャラジャラついていた。

名前表示を見ると、

「デジコノヤロオ」

「…………」

「どう考へても

どうと居りやあ

あいつしかいない。

「はあい…もしもーしつ」

「あつ…新羅か…いきなりで悪いがちょっと質問があるんだが今大丈夫ですかイ…？」

どうやら質問があるらしく電話寄越したらしく。

「うん！何ー？」

仕事の件だらう…。
と随意つた。

新羅以外は……。

「俺と土方さんどつちが
副長に相応しいか決闘すんでさあ…新羅はどつちが勝つと思いやす
か…？」

「総悟…！…俺がいつてめえと決闘するなんて言つた…！」

「早く決めてくだせえ…」

「野良犬がマヨネーズ食いたいってほざきだしたでさあ…」

「んだと鬼畜系が！――おい連沢！ふざけた返答すんじゃね…」

「やっぱ相応しいのは總悟じやないかしら」

.....

「つ……連沢ああああ！……てめえ後でどうなつかわか……」

ヒ
ツ

土方の話などまんじりとも聞く耳持たず携帯をきる。今まで土方の機嫌は更に上へと上昇！火山噴火するくらいに！だが新羅はもしかしたら
土方の機嫌を更に損ねる為にわざとこんな行動をとつたのかは知らないが…。

「時刻は4：25…か。かなり時間潰しちゃつたわね…。」

「あー、やつですね……もつねが紅にせ……一僕達もそろそろ歸つましよ
うか?」

「えー！嫌アル！もっと新羅と話してたいアル！！」

「また今度ね！」

駄々こねる神楽に笑顔を振り撒く。

「私レジ行つてくるから、貴方達は先に外出でて！」

「了解しました！」

新羅以外はてにへずを後にした……だが銀時はひりひと新羅を見る
と神楽達に手を引かれてにへずを後にする。
しばりくすると

てにへずから新羅が出てくる。

「すみませんわざわざ…
いへりでした……？」

「フフフ…内緒よ内緒…」

だがあの皿の量。値段に
訪わす数々の物を頼んだ訳だから軽く三万はいってることは間違
ないであろう。

でもそのお金は近藤さんからだまくらかして奪つたお金だから新
羅は嫌な顔一つしていない。桜が満開したよつた満面な微笑み。

「今日話したこと言つた事誰にも言わないでね…。

それとこの娘達の本当の名…翠石星、蒼石星…つてことも…。今ま
でどおり翠羽と蒼琉で…」「分かりました…」

「なあ…連沢…。てめえ…

死んでるのか…？」

「…はい？」

「気が狂つたのかわからないが銀時は訳のわからないことを話し出す。

「お前、あのコンビニ事件の時、てめえと俺は手を交じらわせた。だがてめえは何か察知したみたいに手を振り払つた。その後神楽やぱつつあんがきた時、ぱつつあんが手を指し伸ばしても手を交じらわせず神楽の時も同じ。

そしててめえと

手を取り合つた時にてめえからは

温かみを感じなかつた。人の体温はそつそつ普通どんなに真冬の日でも少しあは温かみを感じるはずだが、あの日はそこまで寒くはなかつた…てめえの手はまるで死人のように冷たかつた。

「

「かなの」

？」

銀時の凸

銀時の股間におもいでセスピーのある蹴りを食らわす。股間を
抑えながら
地面につづくまる。

「アンタ最っ低！！！！人！死人呼ばわりするなんてマヨネーズ鼻にぶち込んで即死させてあげたるかこらああ！！！」

口調！！！口調！！！

なんかキャラ違くない！！！！

「なんこと言つてる場合ぢやないですか！！！耳闊歩時つて聞くです！！！新羅はね！人一倍の冷え症なんです！！！だから貧血なんてしそつちゅうの」と――かわいそうと思わないですかああ！！！」

「そ…そういうことなの…ごめんなさい変な誤解招いちやつて？私はホント

酷い冷え症だからよく

「大丈夫？」とさう

三才圖會

本居宣長

手は交わせない」と思っている。…。

手を交わせば「大丈夫?」

途中交わしたこと

傷付してあんな醜い振り方しちゃうたってこと こめんなさー…」

「ああ、こりちこそなな」股間が上にあかりなかなか下に降りて来ないため痛みが尋常じやないほど下半身を痛めつける。

「…………翠羽も謝りなさい。銀時将来子供作れなくなつたりひとつすんのよ。」

「知らないですう……死人呼ぼわりしたそつちが悪いんですから！」
そつぽを向いたまま顔を合わせようとしない。

11

意地だけは張る女なんだから……」「

約四分たつたころ
銀時の股間の痛みも引きすっかり直立 まではいかないが立てる
ぐらいに回復した。

「んじゃ私達はこれ…

あなたたちも帰り気をつけてね。」

「はいっ…ではよなう…!!」

背を向け歩きだす。

だが そこで両者側の空気がが変わる。

両者 考える事は違つ。(たがう)

良い人ほひ腹の中は真つ黒黒すけ

「新羅さん達の話なんか凄くビッククリする話もあつたけど
ローゼンマイデン
生きた人形……か」

「かわいそうアル……！姉妹同士で戦うなんて……

あつ……やつこえば……

銀ちゃんはなんであんな事聞いたアルか……？死人なんて……」

「……どいつも臭えーんだ……

あいつら……。」

「？」

「あいつら……まだ俺達に何か隠してやがる……。」

「銀ちゃん（さん）？」

「たくつ……なんでミーティアムでもないやつにローゼンメイデン
教えなくちゃいけないですか……！」

「やつだよー新羅……新羅が翠羽のミーティアムつて名乗るなんて思
わなかつたよ。」「そういえば蒼星石は誰と契約したですか？」「

「それは言えないよ……

翠星石

「なんですか！姉に言えないなんて……！

けちん坊蒼星石……！」

「あつ……私途中でお団子買つてくるから貴方達は先に屯所に帰つて
て……！」

「えー翠羽も行くです……！」

「多分副長争いがどうの「ううので土方と沖田のことだから屯所とかめちゃくちゃにしてると思うんだよねー先に帰つて一人を止めてくれない?崎とか絶対瀕死状態だと思うし他の隊士達も……」

大体予想はつく。近藤とかもつフルチンで魂抜けていそうだし。

「じゃあ僕は帰るよー君達みたいに僕は街護る為に警察にならうだなんて思つたことないし。それに僕にはマスターがいるから……。」

蒼琉にもミーディアムがいるー。翠羽には翠羽のミーディアム。それぞれの志は違つ。ましてや

蒼琉は真選組とは全くの無関係。一緒に住むのは不可能なこと。

「そつ…会える日は少ないからね……。今日会えて嬉しかったわ…また会える日を…。」

「バイバイです蒼星石ー。」

蒼琉はそのまま夕暮れの道を一人歩いていき姿が見えなくなると

「じゃあ私ももう屯所に帰るですー新羅も早く帰ってきてくださいね…」

「ええ… また…」

翠羽は走つて蒼琉とは逆の道を走つていつた。

「あの娘達も馬鹿ね…。

ローゼンメイデンなんだから窓に入つて帰つていけば良いものを…

…

一人佇む道でクスッと笑う。

「死人……だつてさ…。

とつとつ言われちゃつたね。」

「

独り言をぽつりと語りつづく、

前に歩きだそつと一歩踏み出す。

…が

何かに察知したらしく

後方に身体を素早く向ける

誰もいない…

夕日の色に輝く道が後ろに永遠と続き 電柱がどこか並んで立つ
ていて

改めて見ると
氣味が悪い。

「私を就けにきたか…。」 一言言つと、

強い風が新羅に目掛けて吹く。

そんなことお構いなく

また前を向き

そのまま

オレンジに照る公道を歩く。

浮かび上がる黒く長い陰。

陰が映し出した

のた

光(希望)? 險(绝望)?

良い人ほど腹の中は真っ黒黒すけ（後書き）

次は万事屋銀ちゃん宅に帰ってきた三人の会話です

今回はちょっとした番外編的なものです！

騙された後の後悔は重い Part 1

現在・5時半を過ぎた頃

万事屋一家は

我が家「万事屋銀ちゃん」宅に帰宅していた。

その中の会話である。

「いやあ今日は

食つた食つた！明日の朝飯食べなくていいんじゃねえか？もう…。

自分の腹をパンパンと叩き腹一杯だといづサインを送る。

「駄目アル！！！私明日の朝方3時になつたら腹の虫がピギヤーピギヤー喚くアル！朝飯抜きなんてジョーカーの入つていない婆抜きと同じネ！－！」

餌皿からはみ出る程の大量のドッグフードを盛りながら銀時曰く。

その間定春は曰が輝いており舌を出したり退いたりしている。

「何がピギヤーピギヤーだまるで兩の道の中車で
轢かれた瞬間声を上げる蛙みたいじゃねえか！」

「ピギヤーを轢かれた蛙の声と例える銀時。

「銀ちゃん……蛙轢いた事あるアルか?」

…………。

「俺はそんなグロテスクな事はしねえぜ……。
道端に蛙がいたとしたら
ちやあんと避けるしな~!」

どつかの作者と違つてな~!」

にんまりと黒い笑みをこじらり（作者）に向けた。てか私に向けた……！。

あはは~何の事…かなあ……。
そんな事より
次進め……。

「皆さん聞いてください~この人~今年の夏に部活帰り友達と帰
つてたらしいんですけど」

ちよつと待つ……！

「途中友達と道分かれる時にバイバイって言いかけた瞬間「ピギヤ
ー グチヨツ~!」ってなつたらしいですよ~ その瞬間

「……蛙……轢いた……」って

思つたつてププー

そして友達には笑われ作者は恐怖に怯えてその口は終幕えたつて言つてましたが…

次の朝自転車を見たら

前のタイヤの一部は紅い液体がついており、友達とその物体を轢いた場所に行くと…………どんぴしゃ内臓が破裂して紅い液体が回りに飛び散つていてちゅんと自転車の轢いた後がくつきり残つていた蛙が居たんだと…ああああああああああああ…！…！…！

腹を抱え笑う銀時。

その話は忘れたはずなのに…泣泣()

「真面アルか…！亞麻音轢いたアルか…！ほんまに轢いたアルか…ねえねえ轢いたアルか…！…！」

轢いた轢いた連発しないで…。心が痛い。

「つて…なんで作者の重い過去知らなくちやいけないんだああ…！…なんで

番外篇でもないのに作者出て来てるの…！！！作者もつ体育座りしてライトアップされちゃってるよ…！！！

もう絶望に絶たれてるよ…辞めてあげよ…ねつ…！」

新…新ハさん…。

作者…こと私に少しだけ笑みが零れた…………あが…

銀時は口を尖らせ

「えー嫌だしに 僕この頃あーだこーだでストレスたんまりなんだよー」

「何ストレスつて…」

「そんな時やっぱ人虐めて痛め付け暴虐まではいかねえが弱りきつた所で釘を刺す！Sつて最高だよなあ！」

あの作者の顔絶望に

満ちたあの顔！FU〜「

わざとらじいあの顔…。

諸行無常で天罰を出食らわしてやるif
私はとうとう堪忍袋の尾が切れた！わたし作者の
顔の前に一本の紐が垂れ下がる。
それをおもいつきし引っ張る。

「何何〜亞麻音ちゃん それ何のひ グベアツ…！」

天井一部が開くとそこから数個の盥があちてくる。
それの下敷きとなる銀時。
ゆっくり立ち上がる。

「…今度その話私の前でしたら…」

「 田玉ほじくるぞつ

殺氣つ！…作者からの殺氣はどす黒い黒を纏つたオーラが笑顔とは

裏腹に漂つ。

「えじやつ話進める為に私はそろそろ ぱーぱあー 」

新ハと神楽には満面な微笑み。銀時には冷酷な目。冷たく感情の一つもないあの目は銀時だけでなく神楽と新ハにも恐怖に怯えさせた。作者は盤が出てきた所へ登ると天井を閉め三次元へと帰つていった。

一分後

「やくまともな話が始まりますねつ ではどうぞつー！」

「ええつと…まあ話変わりますけど…………

銀やん…ほんとにあのままで良いんですか？」

「あつ？」

新ハの質問に、適当な返事をする。

「今日の奢つてくれた分のお金の件ですよー本文には軽く二三万とか言つてましたがあれ絶対一桁じゃ済まない量でしたよーいくら近藤さんからだまくらかした金だからって近藤さん困つてるはずですよー！」

「大丈夫だよ！あの女…
お妙んとこのキヤバに費やせば？とか適当な事言つて事は終えたん
だろ？心配すんなよ！」

「私さつき新羅が手に握つてたレシートちらつて見たアル。

「30万越えだつたアルよ…」

「…………。」

「大丈夫大丈夫…」

「大丈夫じゃねえだろ！！！！！何30万越えつて！！てめえらど
んだけ高級品頼んでんだよ！！！！！」「私、そんな高級品頼んで
ないアル！軽くSランク和牛ステーキつての5回くらい頼んだけ
アル！後は皆安物ネ！銀ちゃんもAランクの和牛ステーキ三回くら
いだつたアル！」

「それじゃあ諸二桁行くわああああ！近藤さんマジでヤバいですっ
て…！キヤバとかそんな関係なくつ！あつ！
そういうえば

家には高梨さんからもらつた1000万円あるじゃないですか…！
それちよつと分けてあげましょつよ…」

ポンつと右手の拳を左手に落とす。良い案を出したとばかりにジュ
ラルミンケースに小走りに向かつ。

「おお——!!」「炎(ほの)が見え——!!」その金剛童子の叫び——!! お

んなゴリラに渡したところでバナナ代にしか変わんねえよ！」

「あんな税金泥棒なんかに渡したらそれこそ血に泥を塗るようなものだ！」

真選組には渡さんとばかりに一人は淡々と暴発的な事を新八目掛け
て吐く。

新八は「僕に言われても……」と呟く。

「でもそんな事言わずに、ほんの少しだけで……」

ジユラルミンケースを開けた瞬間、

「おーいどうした？新八君金の束見てあまりに衝撃走ったか？」

眉間にシワを寄せて肩眉がぴくぴく上下に唸る。

「あつ…………あの銀ちゃん……これ

金の束じやなくて……

紙の束です……

「はい？」

騙された後の後悔は重い Part 1 (後書き)

何故私「」と畠麻音が出てきたのか自分でもわからぱつ。

小説内にかいてある蛙事件は

あれ……

事実です……。

「田中ほじくるべ」
とか書いてあるけど
逆に
私がほじくられそうですね。

銀さんや銀魂ファンの皆さん（汗）

新八の冗談ふりにやれやれと両手をヒラヒラさせる。

「紙の束?

「冗談きついぜ新八ー!

「うとう眼鏡の度合わなくなつたんじゃねえか?

眼鏡センター行つてきて

巨乳美人さんにでも

診察してもらひな 童貞!」

最後の言葉にグサッと刺さるがそんな事はおいといて新八は急ぎ足で金の束…紙の束が入つたジュラルミンケース」と銀時の前まで持つてくる。

「良く見てみて下さい!!外側にあるのは一万円かと思えば玩具の一万円札!!そして中身はほらつ!

あーら不思議

真っ白けつけの紙の束!

状態ですよ！……「ほんと…
あーら不思議状態つ！

新八の言つてることは「冗談なんかではなく誠に事実であつた。玩具の一万円札が四方八方に広がつており、一万円を一枚めぐれば真っ白けつけのコピー用紙が一万円札の模りになつており「こんにちは」と顔を覗かせていた。

「銀さんつ僕達騙されたんですよ……高梨さんに……金で動かされたんです！それも偽物の……」

「ハツハハハハハハハハ…。

じゃあ何

俺達嵌められたつてか？

命金で買いやがつてそれに乗せられた俺達は今この場で事実しつた。
これで俺達はご愁傷様つて訳か…。

醉狂な話だねー

ガツシャアアアアン

「冗談じやねええぞおおおお――――」

ジユラルミンケースを壁に向かってスパークリング！！見事にケースは木つ端みじんに砕け落ち、蝶が舞うように紙の束が美しく入れ雑じれ舞う。

「何だね騒々しいね……」

煙草を加え天井を見上げるのは「スナック お登勢」の女主人 お登勢。

「ヂウセマタ喧嘩モシテ騒イテイルンテシヨ。関ワルダケ無駄テス！シカトシカト！」

片言口調の猫耳叔母「オネエサマ」

おつ…お姉様ことキャサリン

「お登勢サマ…」「ああ…頼むよ…。」

絡繰り家政婦ことたまは

お登勢に頼まれた通りに仕事を熟した。（こなした）

2階へ上がり、銀時達を黙らせて来いと同時に

家賃収納してこいと。

良く女達の「シコ シコ 話を男が盗み聞きしつね」「レディーの話に首突つ込み

自分でも思つた。

こんな長いサブタイ決めたけど小説本文とタイトルはあまり深い意味はない（笑）

良く女達の「ハハハハハハ」話を男が盗み聞きしてると「ナトニーの話に首突っ込み

屯所にて

屯所に帰宅すると

予想通り土方と沖田の激しい攻防戦が繰り広げられそれを止めようにも止められなかつた局長こと近藤勲はどんびしゃフルティン姿で隊士達に看護されていた。翠羽が来援したため、事はそう長くは続かなかつた。

えつ ?

どうやつて

一人を止めたかつて?

翠羽……

キーンと「鬼の副長」よつ倍怖いよ……。

夕飯を食べ終えた女隊士
二人は自分の部屋へ戻り 隊服に着替えよつとして
いた。

モウ

今日は 新羅達の

巡回田。

「新羅あー何度も言いますがなんであんな連中にローゼンメイデンの実情教えたですか?」

自分の髪を丁寧に解く翠羽。その問いに飽き飽きと

「…………仕方ないでしょ。あの時私口滑りしちゃつたんだから言わざる終えないじゃない……。」

「でも……新羅は私のミーディアムなら知っているはずです。伊達に噂が漏れればまたローゼンメイデンの中で犠牲者が出るんです!!だから私達はミーディアム以外私達を知る人間は排除してきたんです。それに新羅も贊……。
なのにお前は……姉妹をまた消していくつもりですか?」

「そんな事誰も言つてないじゃない。私だって信用できないって思つた人間ならまつ先に肉塊にしてるわよ……」

「信用……できない?んじゃあ……」

「私は信じてる。

あの三人は……万事屋さんは

……絶対……

約束は破らないって……。」

「そんな証拠……一体何処にあると言うのですか……。」

第一私達はこの街に来たばかりで

此処の人間達が
どういう奴らなのか……。

信頼得る的^{まと}

存在が

いるのかまだわからない……

信用するなんて……。

まだ早過ぎです……。

ローゼンメイデンにとって今や人間の存在ミーディアム以外は敵意として見なされている。そう簡単に人間を信用しようとしてもせざる終えない事は新羅自身も充分理解している。

女の「シ」話つて大抵くだらない事だから盗み聞きしてもいいまで価値

「翠羽……」

確かに貴方達の姉妹は人間達の手で消された。
そりや信用するなんて

人間は……

愚かだから……。

勿論私も……。

でもね……

万事屋（あの三人）だけは違かつた。

普通の人間にも私にも無い 何か…」

そこで言葉を止める。

「何かって一体つあの人間達に何があるつていうのですか…？」

翠羽の問いに新羅は小さく首を振る。

「その“答”は
貴方自身が見つけないと意味がない。貴方がその
“答”を知った時貴方は
多分人間達と…」

「悪いけど……。

私はミーディアム以外の人間とは交流を深めようとも間柄を築きあげようとしたことはこれっぽっちもないです。ましてや此處のポリ公共とは仕事付き合いの為だけにああしてマコラー共と話してゐるだけ…。正直なところ

人間なんて……。

ただの

ジヤンク…。」

「翠羽！…！」

「…」

突然、新羅が大声で自分の名前を言つたものだからビクッ！…と肩を鳴らす。

「むやみやたらとその言葉を軽々しく口に出すなつて何度も言つたはずよ。」

ギロツと暖かみのない目で翠羽を睨む。その目を見た翠羽はまるで金縛りにでもあつたかのように身体が硬直する。

「…」

「ごめんなさいです…。」

頭を下げる

…と

フツと一瞬にして新羅の日常の顔に戻り
分かれば良しつ！

そう発すると、すたすたと廊下を歩いてこき

翠羽もすぐに自分の髪を櫛で解かし終わると新羅の後に続いてその
背中を追いつめ早足する。

普段あまり長いと思つた事が無い廊下が何故か今では彼女を追つて
るだけというのにとっても長い感じがした。

まるで

どんどん新羅が

翠羽（自分）から存在が遠ざかっていくかのよつじ。

そんな廊下を歩いてこき、やつとの事で新羅に追いついたと思こさ
ふと立ち止まつた為。

翠羽も歩く足を止める。

「どうしたですか…？新…」

「賭けをしましょつ…！」振り返り、自分の頬の近くに人差し指を
立てる。

「かつ…賭け…？」

思わず聞き返す。

「もし貴方がその“答”というものを見つけられたらその時は貴方の勝ちということでミーティアムとして私が貴方の……何だろうなあ……まあ単純に欲しいものいくつでも買ってあげる。

もしその“答”を見つけられなかつた場合私の勝ちだから……

その時は……

貴方が私の言いなりになる！

どう賭けてみない

「それ翠羽のほうがリスク高いじゃないですかっ！……それももし私が負けたら、逆の立場になるつて[冗談]じゃないです！」

契約者より人形のほうが境遇が高いことでも言いたいのかその賭けに応じようとはしない様子

「私はそんな賭け絶対乗りませんから。」

ボソッと言葉を吐き

新羅の後方にいた翠羽は新羅の横を通り過ぎ観点を変える。

「ひつ……酷いっ！……」

顔だけ振り返つてみると両手で顔を隠しながら歎く新羅。

「私は…貴方の為を思つて
善い（よい）妙案を考案したというのに、
そんな簡単に拒絶するなんて…」

ウ、ツウ、…

…と泣きまねを

してゐる事はお見通しなのであえてそこはツツコまず話を続ける。
「だから…というより新羅が考案した私だけリスクの高い賭けなん
ぞ誰も受けないで…」

「だったら万事屋さん達に…本当の事言います。」

怪しく引き攣るその唇。

「何をです。」

「翠羽は蒼琉の双子の姉で実際気が強いけど
実はローゼンメイデン

第一ドールには魂削る程ホントは弱い人形で一度泣かされた事があ
つて

ホラー系大好きだなんだ言つてるけどそこまで怖くないホラー映画
を見たその5分後早々涙ぼろつぼろ流しながら私に抱き付いて來た
り…」

「…」

「後…“プロフイール”に書いてある翠羽の身長の事だけ161・

80cmって書いてあるけどあれはペンヒールブーツを履きながら伸びした時の高さプラスあのブーツ

「シーケレットブーツ」ってやつで普通のブーツよりも踵の高さが10cm高いやつで実際翠羽がブーツを脱ぐと本当の身長が分かるんだよ。本当の身長は13cm……

「だああああ……！」

分かつたあ分かつたです……乗ります乗ります！リスク高いのなんて糞くらえでその賭け乗ります！だから言わないで下さいです！そして早く巡回に行くです！」

「はいはい……」

便乗したため新羅の顔は笑みで溢れていた。

その顔を見てムスッと顔を蒸らせたまま背を向けると、ふつぶつと文句を言いながら廊下を後にした。

その廊下に今いるのは

新羅一人

その笑みから瞬間に苦笑いに変わり、視線を三日月へと向けた。

「これがあんたの為なんだよ……。分かつて……翠羽。」

三日月に語り掛けるよつこ言つと

その後は

翠羽と共に巡回を始めた

浪士共の

動きが見当たらなかつた為

その日は早々と巡回を切り上げた。

新羅達はまだ知らない。

宇宙から

一隻の 戦艦が

地球に向かっている事なんて
…

女の「シラ」「シラ」話つて大抵くだらない事だから盗み聞きしてもやうまで価値は

銀) 一隻の戦艦一?

それつて...?まさか...

悪の華は美しき茨（はな）（前書き）

あの方々の「」登場――――――

悪の華は美しき茨（はな）

それは遠い遠い銀河の果て

光年まで続く宇宙には何千何万ものの星が光つては滅び光つては滅
びの繰り返しをしていた。

どっちが前で後ろなのか
どっちが左なのか右なのか見回しても分からぬ宇宙からは
一隻の戦艦が地球を目的とし向かいつつある。

その

戦艦の外部には

あるマークが刻まれていた

戦艦内部にて

「また地球へか…ハア 元老うえも元老うえだね…。」

幾度もため息を付く長身大男 阿伏鬼

「俺は樂しみだよ…またその“侍”つて奴に会えるんだから」

神威

オレンジ色の髪を一本のおわげとして結つてあるは神樂の兄
「けつ…呑氣でいらっしゃて良いなああんたは…
すつといじりつゝ…」

「んで今日は何処に用事? やつぱり江戸…?」

「ああ…おまえさんの

大い好きな侍とかいう奴のいる江戸だよ…。」

「そつか…だつたらより
一層樂しみだな…」

「おいおい…今回ばかりはおまえさんの遊びに付き合つたらんな
いんだよ…」

「へえ…手厳しい。」

珍しくも真面目な顔をする阿伏兎に「ホ」の形を作る神威

「俺は何時だつて真面目だよーー！」

それは失礼。

「ああいしれ…。おまえさんも上からの指示忘れちゃあるめえよ…。」

ばつ然つゝか頭の丹に隠る舞越

「ああー人探しとかの！」

「そうそ…その人探しの手掛かりになるのがこの写真だ。」

所々破けたり血が付着した一枚の写真を神威に渡す。写真に写る人物の顔見をし首を傾げる。

「……誰この女。」

「さあな…名は確か

(そのせうりおん)とか詰つらじい。「

「後の情報は？」

「何もないさ……手掛かりはこの写真と名だけ……後は適当に見つけてこいつて上からの指示だ。全く人使い荒いよなあ……上も。」

ひょいつと神威から写真を取り上げる。

「こんな女^{アマ}さんを写真一枚でどうやって探しでていうのか。そして
なんで上はこの人間を必要としているのか。」

「ふーん… まつ頑張つて…」

「待てーーー今回ばかりは自分だけ楽しよウなござらせやしねー
よ」

アップロードする。

「ええ… だつてせつかく地球行くんだから侍とかいう奴と闘つてみ
たいし、最もは銀髪のお侍さんとだけ…。」

笑顔の裏の夜^{アキ}兔の本性。

「いいか? 今回は俺達第七師団だけでの搜索だ。情報網が少ない元
で探すのにだつて時間はいつも^{もと}の倍は欲しいとこを短期間見つけ出
せつての事だ。

耳かっぽじつて知つておけ。」

「知つたから後は頑張れー!」 適当に手をヒラヒラさせる。さすが
にこのままではと悟り焦る阿伏兎

「分かつた! 分かつた! 事が終わつたら帰還日まで空いた時間は思
う存分アンタの好きにしていいからー!」「なら良こやつ!」
顔色が一瞬にして綻びる。ほんと氣まぐれだよなこの団長も…

「……我が儘な上司だよ。ほんと。」 再度重い溜息を零す。

「ああ… もう一つ情報があつた。」

「?」

「その女はあまやど

そこのへん無能な女じゃないらしい」

「何」とはつまり……？」

「戦闘能力は有りな女だと聞いた。人斬りまではいかねえがな……？
まあ俺達ほどじゃないが……」

「へえ～

じゃあた……聞くけど

その女

強いの？」

「わあおまえさんの期待に応えられる保証はないぜ……」

興味津々に聞いてくる
団だん…提督ていぐに少々焼く。

心中もため息の色で一色に染まる。

俺の血はその言葉を聞き 痛いた。

多分この女も血に飢えた哀れな鬼

こいつからは

同じ血の臭いがする。

俺の血は
何時渴^いきがとれるのだろうか?

銀髪の田^ミ那と殺り合^ハまでは渴きがとれないと思つたけど

この女は

俺に

初めて

血を(俺を)騒^ガさせてくれた

期待しても良いのかな?

期待の前に

ま
せ
し
愉

くれ
る
の
か
て
な
?

血で血を濁させる。

そ
う

鮮血な血で

この女と

銀髪の旦那

どちらが

血に相應しいのかな？

悪の華は美しき茨（はな）（後書き）

見事に神威達のキャラ崩壊してゐるな（苦笑）

ファンの方々どうもすみません！――！

たまには味方も敵も関係無い」ときだけである（前書き）

銀）久々の登場じゃね…？

（神）そうアルな。どうせ作者の氣分次第で出すか出さないか決まつてるアルけどな！

銀）そーそ…

だからもしかすると今日で最後かもしれない俺達の前書き、後書き出演は…。

（神）まじアルか！…！

今日で最後アルか！

おい

「テスト前だつてのにシャーペン持つ氣のない腰抜けやろー」…！

亜麻音

はい…腰抜けやろーです。

（神）出番無くていいから
酢昆布大量によこすネ！…！

銀・亜麻音

そこかよ…！…！…！

END

新) また僕出番なし……?

たまには味方も敵も関係無いときだってある

日の出が上がる。

日は山々の連なりから
ひょっこりと顔を出し

雀は鳴き

鶏は朝を告げ

犬は何度も欠伸をし

木々は揺らぐ。

そして

歌舞伎町は今田も賑わう

取り寄り爺さん婆さんは
起床が早く

颯爽と店のシャッターを開ける者や
ランニングスースを
着こなし白い息を出しながら走る者

そんなんある路地裏では
笠を被つた長髪男が

新聞の記事を日を逸らさず直視していた。

男が見ている記事は「カカカ」と掲載されていた

「連續庶民殺人事件

裏表の顔の琲瑠袈」

と…。

「琲瑠袈が裏ではテロ活動…。なんとも…」

（だが事件解決はまだ早過ぎる。
琲瑠袈が真選組の手に殺られるのはまず確かだといつゝとは分かつ
た。だが…
客が何故…）

「かゝつら」

朝つぱらからの威勢の良い勇ましき声。

振り返つて見れば

「貴様！四番隊の…」

四番隊隊長・連沢新羅

「ここに在り。

「神妙に尾繩に付きやがれ……」

鞘から刀を取り出す

それと同時に桂も刀を手にとるつとした。

「なーんちゃつて……」

……が 新羅は刀を鞘から半分まで出したところすぐさまに鞘に収める

「なーんちゃつて！ 今日はアンタは捕まえないよ！ 話をしに来ただけ！」

バサイン + ウインクのおまけ付きに桂は「？」となる。

「もしかして貴方？」

銀時に

「連続庶民殺人事件」教えたの……？」

意味深にも急に聞かれた事に状況が掴めなくなる。だが言葉の意味を知った上で

「何故俺が銀時に言つた事を知つている？」
と答える。

「いや……攘夷戦争前からの旧友の仲だったら今でもその繋がりは切れてないだろうしね……。

それに……」

言葉を切る

「俺の話を聞けっ！何故俺が銀時に言つ……」

「銀時は」の事件に深く関与してゐつて」と……。」

「……」

「……何故銀時が……」「あの人斐瑠袈の将官さんに依頼されたらしいのよ。家族を殺された……だから復讐^{むくし}がしたいって
だけど実際は斐瑠袈の仲間の仇を打つ為に銀時は利用された。

まあ、殺人事件とか呼ばれてるけど実態は異なる。私は斐瑠
袈を潰す為に動いたまで。まあ無理もないわよ。表の顔は一般つて
見做されてたから

「動いた……まさかこの事件は貴様が……」

「まあそういう事ね……。

殺人事件ではなく警察としての役目を果たしたまでだけど……

「貴様……いや連沢新羅……。では銀時と接觸してゐるのか？」

「ええ……かなり前から。
相変わらず……

この街を謳歌してゐるわよね……。

白夜叉……「――――

田を力ヶと見開く。

「何故貴様がその名を――」

「さあなんででしうね?」

クスクスと不気味な微笑を浮かべる。

「でも一つ忠告おくれわ……

白夜叉今は平凡な毎日送つてゐるナビ
歌舞伎町にはまだあの男を狙つ奴は、アロ、アロ――のつて事は深く
その胸に刻んだいたほうがよろしげにかど。

仲間が死んだら嫌でしょ?

いくら攘夷浪士の中でも

過激派と恐れられる

鬼兵隊当主

高杉晋助……。

貴方方にとっては今なお彼は

「仲間」

だと思つてゐるんでしょ?

彼が死ぬ姿だつて見たくはないでしょ……。」「あ……貴様。一体……

「かつて貴方達の

恩師 吉田松陽のように大切な人をまた失いたくなれば…」

力チャ

再度刀に手をかけた。

「幕府の犬が何故俺達の恩師を知つているのかそんな事はどうでもいい。たが貴様が俺達を気に食わずして仲間に手を掛けるような真似をしようならば今この場で息のねを止める。」

穏和した面シラで

新羅はまあまあと宥める。

「これは忠告よ…。ただの」

だがまた笑い出す。本当に不気味で文字通り

奇妙奇天烈。

「貴様はつ… 一体何を知つている…！」

「！」の世界の全て…

「…！」

「とか有り得る訳ないじゃん…！…アツハハハハッ…」今のフレーズの何処に坪のはまり所がある。

自分の腹を抱えながら

目に涙を浮かべ

「これ傑作～」とか言葉零しながら、俺を嘲笑うかのような彼女の

田の前に立っている俺は一体どんな顔をすればいい？

目の前で爆笑している女は目に浮かべた涙を拭うとまた俺に

「今のは軽いジョークだから忘れ プ アハハハハハは…」

単なる馬鹿なのか
単なる阿呆なのか

今はそんな事はどうでもいい……。

ただ

「あ」

新
あ

新羅あゝ

何処ですかー？」

桂達の居る路地裏の近辺から新羅にとつて聞き慣れた声が耳に入る。

「あ……忘れてた。

朝の巡回の途中だったんだ……。」「

ぱつりと言葉を吐くと

ぐるりと回り桂に背を向けじやあね 言い

歩みだす。

「おい待て！まだ話は……」

「近々（きんあん）気をつけなさい。つて銀時に言つておこでもらえる？」

狂乱の貴公子さん 自分に置かれた境遇を良きものとして維持しておきたいのなら四六時中自分の周りに蜘蛛の糸を張りつけておいて、自分の身は鬼の皮でも被つて（むおつて）防御力を高めておいたらつて……」

遠回しの言ご方に何を的とし言いたいのか…。

「？」も黙する。

「つまり……自分の身は自分で護れつて言いたいわけ……。

今日の事は、
二人だけの秘密。
また会いましょう。

次会う時は

お互い 敵同士つてわけで。」

そのまま新羅は死角を曲がり巡回へと戻つていった。

一人路地裏

男は咳く。

「とにかく銀時のところに行くか…。」

そう言い 万事屋へ
向かう男の背中を

朝日は虚しさを抑え

乾いた空へと光を照らす。

秘蔵は後(のち)の書といなむ(漫書モ)

銀) オセラ。

新) ほんとに

神樂)。

畠) ??

銀) 何してた。

更新もろくにしねえで。

畠) あつあの...これには訳

銀) 何!!!!してた?

畠) はいっ!!!!すみません!!!!サボつてました!サボつて遊んでました!!!!すみません!!!!おじですみませんでしたあああ!!!!

秘密は後（のち）の夢となる

「一体どうこう事だ……」

「どういう事もいついつ事ありやしねえよ……
説明した通りだら……」

「てめえ何回説明すれば気が済むんだ……」

怒り氣味の溜め息を一つ零す。

話せば長い。

簡潔に言えば朝っぱらから勝手に人ん家あがつてきて夢の世界にレ
ツツ・パーリイしている人たたき起こして勝手に冷蔵庫漁つて勝手
にソファーに座つて説明がどうやらいつや言われて勝手にキレて勝手
に話が進んでいたらしい。

「てめえじゃない桂だ！！貴様の説明の仕方が悪いだけだ！！！
瑠璃袈の将官高梨とかいう奴に依頼された内容が家族の敵討ちだな
んだでその依頼を請けた理由が、ジュラルミンケースにびつしりの
一千万を貰つたからなどと軽いノリで受けた！！だがその金は偽金

！！！しかもその男は家族じゃなく琲瑠袈の仲間の為の仇を打つ為だけに貴様を利用しただとお！！！」

「だからさつきからそう言つて…」

「何故それを俺に伝えなかつた！！」

桂の怒鳴り声に小指を軽く耳の穴に入れ塞ぐ。

「…………うつせえーなあ……んな一々てめえに報告してられる程暇人じやねえんだよ！！！学校から帰ってきた子供に「今日はどうだつたの？楽しかつた？」

とか聞く何処ぞのお母さんかつ！てめえは！！」

ベタな例えを桂に向かつてそう早口で言つが、桂はその言葉を振り払つよう

「つ貴様！命が買われたも同然の事だろ！！！一步間違えれば、貴様死んでいたんだぞ！！！今回の琲瑠袈事件は連沢新羅が犯人だつたらしいが。」

「そうそ…あいつが…

……
ん？」

銀時は自分の耳を疑つた。

(こいつ今連沢新羅つて
言つたか？
なんで知つてる？)

この事件の犯人は

テレビでも新聞にも載つていなかつたはず。)

「どうやら何故俺が珊瑚袈事件の犯人…すなわち連沢新羅を知つてゐるのかと今思つただろ?」

「ジラ…なんでそれを?」

「俺も聞きたいことがある。

あの女は一体何者なんだ…?」銀時も問うが、逆に桂に問われてしまつた。自分の問い合わせが綺麗さつぱりスルーされハア…と息を漏らし仕方なく桂の問い合わせがだ?と聞く。

「貴様とあの女の関わりには首を突つ込みたくないがあの女に言われた。

「貴様か?銀時に珊瑚袈事件を教えたの?」とな」

新羅の口調とは少し舌が滑る話だが確かに新羅は桂にそう言つた。

「あいつが…?…新羅がそう言つたのか?」

「ああ…貴様に教えた事は事実だが…何故あの女が?銀時お前が言つたのか?」

銀時は頭の奥深くまで…いや脳の奥深くまでそんな発言したか思い当たる形跡がないか回路を辿るが、

大体の事

「桂にカクカクシカジカ教えてもらつたんだあ！」

「へえ～ そ～なんだあ～！」

「じゃあ桂君に銀時に教えたの？ って言つてみるね～」

「うんつ～…」

アハハあオホホお

だのそんな呑気なハ ジみたいなことは普通銀魂の主人公はしない。
事実上回路を辿つたもののそんな事を新羅に告げた覚えはない。

「いやもうこ～… キヤラ崩れる。

なら貴様はあの女に言つてないと？」

「逆に言つ理由がわからない。」

「確かに… それと銀時。あの女が言つてたのだが近々気をつける…
などのことをお前に伝えろと言われた」

「近々気を付ける…？ 何にだ？」
眉間にしわを寄せながら、桂に問つ。

「さあ……何にかは知らないが……あの女……何故か松陽先生の事を知っていた。」

「……」

銀時は驚きのあまり目を丸くさせた。

「なんで……あいつが……」

「俺もそこまでは問わなかつた……。」

「あいつ……俺達と同じ塾通つてたか？」

「いや……仮にそつだつたとしたらあんな性悪女
俺は

嫌と言つぽひ目に焼き付けてるはず。

第一見た目からしてまだ未熟だ。歳は……そつだな……。まだ二十歳い
つていのではないか？

それなら話の筋交いはまずない。

俺達があの女と接触を交わすなどまず不可能……

「……

言われて見ればそつかもな……」

そこで一回話は終わる。

銀時と桂は

あの女」と……連沢新羅の「」とこついてそれぞれの真理を築くつと能
動した。

桂は勿論のこと、連沢新羅の事だけに脳を専念させた。

だがある男だけは違う。

銀時は

奥平翠羽…いや

翠星石と蒼星石が

「薔薇乙女
(ローゼンマイデン)」が
そこに関係しているのではないか
と。

縁は切れるもの?

どのくらい時間がたつたであろうつか?

いや時間はそれほどたつていらないのか?

黙考の時間は彼等の脳裡を狂わせる。黙なる時。

爆睡している神楽の突然の寝言が彼等を脳裡から呼び覚ませる。

「…危うく睡魔に負けそうになつた。」

「寝てたのかよ。」

どうりで静かなはずだ。と銀時は胸の内で答える。
そんな中桂は銀時に告げた。

「銀時

…あいつとお前がどうこう関係かは知らない。

だが…

…あの女とは縁を切れ。」桂から告げられた意外な言葉

「あの女…ただ者ではない。寧ろあの女は…

関わってはいけない匂いがする。「

「変な言い掛けりは寄せ。俺は好きあの女と関わったつもりはねえ。」

「ならば……」

「だが……あいつは……聞かなきやなんねえことが山ほどある。勿論ジラ……てめえの言つていた近々氣をつけろたあの事もな……。」

「だが銀……」

桂の見たその日……。

その日は、力強く威儀で他人を圧迫させるかのような意志が伝わった。

返す言葉もその制圧によつて押し潰される。

「分かつた……。ぐれぐれも氣をつけろ……。あの女の証言……。嫌な感じがするからな。」

「言われなくても用心するたあ……。」

「せうか……。なうば俺はそろそろ帰るとしてよ。」

そう言ひソファーから離れ玄関へと向かう。

「じゃあな銀時。」

「あ……ジラも気こすかぬよ。」

「言われなくともな……。」

その後氣づく。

ジラの背中は何故か重く見え。

お決まりの

「ジラじゃない桂だ。」

あの金額が無かつたこと

目的？約束？そういう大事な事を忘れた時自分の無力さに気づく人は数少ない

ねえ

どうして私は……

この街に来たの……？

私が……この街……に

来……た理……由……？

……用も無しに来た……？

遊びにきた……？

違ひ。

だったら……？

真選組に入った理由なんてないはず……。

私は用も無しでこの街

に来た……？

真選組に入つた？

本当に

この街を守るために……？

う。

治外を護るために
？

違つ

違つ違つ違つ…

私はただ

治安なんかこんな街なんか

！！

貴方に必要あるの？

貴方は…目的を忘れている。

違つ

。

忘れてなんかつ.....。

ローキングメイテンの想.....?

お父様に会わせる為.....?

〃一"ティアムだから.....?

あんな

ジャンク（壊れた子）

れつれと……。

お前には関係ないっ！――気安く私に話かけるな――！

……何を言つてゐるの？

貴方は私で

私は貴方でしょ？

だって この身体は

私は
私

が
う。

ち

殺さないで！！！！！！

死にたくない！！！

痛い！！！

助けてくれつ！！！

助けて！！！

当主様つつ！！！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！ 助けて！！！血が…血が…

熱い熱い！！！

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

祟りだ！！！！

逃げる！！！

お母さん！！！お父さん！！！痛いよ！

殺さないで

て め や

お嬢様逃げて。

私は
：

なんで
？

忘れてしまつたの？

ねえ
。

おせれえ。

おせれえ？

やめて……その呼び名で私を……私を……呼ばないで……

私の名前はつ……！

どうして貴方だけ……

……生きてるの？ どうして……

「…………」

「…………」

「…………」

「お前が死ねば良かったのに…………」

「…………」

お前がつ！！！

「.....まこちゃんは二年生です」

۱۵۱

「五...」

「新羅つ…」

誰かが私の名を連呼している。

「一体誰…？」
「…しても声が大きい…」

「新羅つ…！…しつかりしる…おこつ…！」

はつと目が覚めた。
私の目の前にいるのは

「土方…や…ん？」

鬼の副長こと土方が
私の両肩を左右激しく
揺らしていた。

そして周りを見渡すと

隊士達や局長、沖田達が私の周りに集まつてとても心配そうに見ていた。

特に翠羽は……。

私は布団から上半身だけ起きていた。

気がつけば自分のこめかみ部分に両手を当てさうに荒い息を早いテンポを繰り返しあまり酸素を吸えていない状況であった。

そして私だけが

隊長服ではなく寝巻き姿。

身体は大量の汗によつてべたついており

類を伝つて落ちる汗は嫌に生暖かく布団に染み渡る。しばらくすると荒い息も落ち着きを取り戻しハアと息を零す。

「土方さん…私…一体？」

私は土方に問う。

だが土方は

「俺も詳しくは知らねえ。要は奥平に聞け…。」

私は翠羽に目を向け

「翠羽？」

「私と新羅が朝の巡回に出回っていた時です。

用があるとか言った新羅はそのまま10分くらいしたらすぐに戻つて來たです。

で…また一緒に巡回し始めた時、新羅が急に自分の頭抱えて苦しみだして…そのまま倒れたです。

私はすぐ隊士に連絡して屯所に連れ帰つたです。

でも新羅はそのまま意識不明のまま一日田代覚める事はなかつた。近藤さん達は皆戻つぱらから任務で屯所空けてて私と新羅だけココに残つてた。

私は粥を作つて此処に来ようとしたその時誰かの奇声が屯所中に響いて慌てて声の発するほうにきたら新羅が何かに怯えるかのようになにかを発してて私は何十回も新羅を呼び続けた！でも新羅はずつとずつと叫び続けてた。そんな時隊士の皆や近藤さんが帰つて来て私は助けを求めた

そこで

土方が貴方を……。」

そこで涙声になりだした翠羽にありがとうと言つた。
そして隊士の皆さんも…勿論土方達にも

「(迷惑をかけてすみません。」 そつ言つた。

土方は

「つたく。余計な心配懸けやがつて…。」
そつ溜息混じりに煙草を吸つた。

近藤さんも

「びつくりしたぞ！…急に翠羽が「新羅がつ新羅つ」って抱き着いてきて…」

「抱き着いてはいないです、…」の工口親父が…」
早口に抱筋る。

沖田は

「大丈夫ですかイ…新羅…。土方の野郎…あんな強引に身体揺さ振つたら
出るもんも出ちまつでさあ…。
レディーへの振る舞い方とか知らないんですかね？
可哀相な新羅でさあ…。
まじ死ねよ土方…。」

口調が土方と名にかけた瞬間の田つきが擁に怖かつた。

「おい総悟…。今すぐ表へ出る…！」

狭い部屋で

一瞬で宴と化す。

そんなやり取りを交わす

皆を見て思わず笑う。

「ありがとう……」

そう笑顔で御礼を。

お前が死ねば良かつたんだ

あの時の言葉が

走馬灯のように蘇る。

やつ……。

思い出したくもない。

あの頃の記憶。

ぬるりと肌に取り付くあの液体。そしてまわりの…。

あの日…。

私は全てが

…私が

…私に

…私を

…私で

なくなつた。

「新羅…俺達は今から任務に行つてくる。屯所を開けるがお前が見

張つていひ。

「えつ……でも私……」

「仕事だなんだで疲労が溜まつてゐんだが……
今のお前が行つたところで浪士共に斬られるだけだ。今田は安静に
しておけ……。」

「まつ待つて下さい……私は大丈夫です！そんな心配いりません
……それに私は四番隊隊……」

「これは副長命令じやねえ！同長命令だ……！」

近藤さんを見ると

相変わらずの無双な笑顔。

「頼むよ新羅……。お前は確かに隊長としての役目を果たしている。
だがたまには自分の身体を休めることも隊長としての役目でもあん
だよ。」

「……分かりました。」

さすがに私達の長 近藤さんの直々の令によればそれはそう逆らえ

ない。

「大丈夫です新羅。貴方の変わりは私が勤めますから!」

翠羽はそう優しく言いかけた。私はよろしくとだけ伝えた

「じゃあ行つてくる」

近藤さんと土方に続き、翠羽は私に手を振り隊士は私に一礼をして部屋を出て行つた。

古びた渡り廊下をギシギシと歩く音。

始めは大きかつたが次第に静寂となり。
やがて無音…。屯所からでていった証拠

虫の囀りさえ聞こえない。
静寂だけが走る。

障子の隙間から差し込む光

月光

その光だけが
彼女を美しく着飾らせる。

あの日の

記憶を消し去る

かのよつ

新羅はゆつぐりと布団から起き上がり

隊服に着替える。

腰に真剣を差し

屯所を後にした。

足が止まらない。

止まれない。

行かなければならぬ。

もつ歌舞伎町から遠く離れたことが一目で分かる。ターミナルが点状になっていたからだ

向かった場所（先）は

〔立ち入り禁止〕

立入禁止の貼紙が何十枚もの張り巡らせて
入らせる者を拒むかのように柵が邪魔をする。

柵と柵の間から見える景色は暗くて良く見えない

⋮
が

月光で少し分かる。

古びた家々
昨日使っていた
雰囲気を漂わせる井戸
茂みの中の自転車
外側に蔓が伸びた家

回らない水車

くらいしか分からなかつた。

あの日のままのものもあつた。

だが

長年放置されたこの村にも

生き物が焼け焦げたかのような臭

葉に

木々に付着して
固まつたままの血。

そして

自分の足元に
転がる白骨。

今だ腐つてない

死体も一體二體この目で確認した。

これは

祝福なのだろうか…？

あの口を忘れない為の

そんな私に

神は

贈り物を
授けたのだろうか?

私を

幸せの道に進めさせない為の

不当の贈り物を

「どうですか?久々の故郷は……」

「……」若い男性の透き通るよみつな声

その方向に田だけを向けた

木の真上に立つ三田円を背景とした凜々しい姿

頭に小さなシルクハットを乗せ

タキシードを纏う

何処かの執事なのか？

ただ

その姿はいかにも

人間などという姿ではなかつた。

兎

確かに兎の顔

目は赤く

耳も長い

「ラプラスの魔...」

兎が「足方向したら誰だつてドン引き。」と唖然と退く（前書き）

更新遅くなつてしまつま」といすみません

兎が「足方向したら誰だつてドン引き。」「畠然。」「退く

「ラプラスの魔。」

木の真上にいた兎は地面に静かに着地した。

ゆっくり新羅の元へ歩み寄る

「私に何の用……？私じゃなくて

あの娘達に用があるんじゃないの？」

あの娘達とは
薔薇乙女ロゼンメイデンを表す

ふと兎は足を止めた。

「あんなガラクタ共など眼中にございません。ネジを巻いただけの
操り人形」

「あつせつ……」

笑顔で隠してあるがかなり彼女はキレイでいる。
彼女がミーティアムということを知つておきながら。

「で…何しに

というかその前に
貴方が此処へ私を誘つたのでしょうか?

わざわざあんな惨たらしい夢見させて…

兎は短く笑つた。

「話の御理解が早くてこちら側としては有り難い。過去の見物と致しましてはちよつじあのよつた夢が最適かと。」

相つ変わらず虫酸が走るわムカつくわヘドが出るわ糞兎が…。

「へえ…」

「本題とこきましょ。」これを「」覧に…。」

ラプラスの魔が片手を開くと

光輪を伴つた結晶が出て来る。

「そつそれはつ！」

ローザミスティカ！！

ローゼンメイデンの心臓に当たる部分

ローザミスティカ

それを何故に馬鹿兔が持つてゐる？

「そのローザミスティカ…。誰の…それも…」

「第6ドール離

そして

第2ドール金糸雀

カナリア

「…………」

新羅は目を大きく開いた。

「待つて……離のローザミスティカは水銀燈が持つてい……いや奪

われた…。それをなんで貴方がつ！」

そう雛苺がゴミ捨て場に捨てられていた時に雛苺のローザミスティカは存在していた…だがあの水銀燈に奪われた。

「金糸雀あの子…なんで…」

金糸雀が

恐れた事態がとうとう起きてしまった。

第2のアリスゲームの敗者

一体誰が？

「第一ドール水銀燈は誤つて第一ドールのローザミスティカを手放してしまった。雛苺のローザミスティカはあの人形が嫌いなのでしようか？私の元へ飛んできましたよ。」

「あ…りえない。貴方何をしたの？」

「人聞きの悪いミーディアムだ。

これは忠告です。

「歯車は止まらない。
時間ときは動き出す。

針は巡り廻つてやがて
頂上てっぺんへと刺す。

事態は一変し

壊れ壊れの現実世界で生きる為には

王の命に従うしかない。」

「何が言いたい…」

「連沢新羅…時は待つてくれないのです。
貴方がミーティアムで

私は兎と。

だつたら

ミーティアム（自分）の

立場として沖介の役目を果たしなさい。

あのコンビニ事件の時
私が何故貴方に白夜叉に

忠告をせたか分かりますか?」

「?」

「いざれ敗者は
数多く在る事となる。
事態は大きく歪んだ。
これですぐにゲームはまた新たな展開を迎えることでしょう。壊れ
たもの同士の…

…そしてより強き者を求める旅が…。」

「

「その強き者といつのが、
桂と銀時ってわけ……。」

でもあの人達は
ローゼンメイデンと
契約させる訳にはいかないこれ以上ローゼンメイデン同士争わさせ
ない為にも
彼等自身にも…」

「ミーディアムとしてそれが正しいと思つのなら
ゲームの行き先はそちら側に傾くことでしょう。

おつと時間だ…。

また漂うこととしましょつ次会つ時の敗者は誰なのか？見物です。

「つーー待ちなさいーラプラスーーー！」

兎は突然切り開いた空間の中に入りその場から消えた。

「なんで…ローザミスティカが……。」

その頃

△のフィールド内

空間と空間の狭間と呼ばれるフィールド内で鬼は飛んでいた。

「さあ新羅…

お前に残された選択肢は3つだ。

一つは

ミーディアムとして

アリスを目指す人形に力を貸すか？

二つ目は

ミーディアムとして

ではなく

その躯を
ローゼンメイデンに
乗っ取られるか？

三つ田は

この街にきた目的
：
自我の目的を最優先に

復讐とこの道を選ぶか…

人間なのか？

それが

何かがうごめきました。

彼女の中で

ドクンッ

獸なのか？

我々には知る術もない。

機嫌損ねたままの人はお先真っ暗な人生辿ることになるかもしれないよ

翌朝

夜明けと共に聞こえてくる罵り声は屯所から

爽やかな朝なぞと今の屯所では有り得ない状況に陥っていた。

「つたくこの馬鹿女がっ！あれほど屯所を見張つてると…身体を休めとけて局長から言われてたのに…！」

少々御立腹な翠羽。仁王立ち姿で腕を組み
見下ろす先は

「いやあだからそれは自販機に用があつただけで…」

翠羽の機嫌を宥めようとする

布団から上半身起き上がらせる新羅。ただその新羅は

右腕に

ギプスを嵌めていた。

そう昨日の

ラプラスの魔という兎に呼び出されたあの晩の帰り道
人通りの多い公道も夜ではすっからかんのからっぽな道になつてい
た。そんな道をただ一人新羅は独り占めするように歩いていた。

が

それもつかの間

その路地裏から

浪士が何人もの現れ

油断していた新羅に
一人の浪士が斬り掛かつた

辛うじて背中は斬られずに済んだが
利き腕の右腕を斬られてしまった。

その浪士達はすぐにその場から立ち去つたらしく
新羅も重傷を負つて
のこのこと屯所に戻れば
先に任務から帰つていた
真選組一行に…特に翠羽に怒られたといつ。

それで済むなら有り難いが朝の稽古をする為起きた瞬間にも異様な
オーラを後ろに纏わり付けながらビックチ食らつてゐるというのが
今の状況。

だが新羅も翠羽に言えないことは多々あるのだ。

さすがに新羅もミーディアムといえど

ラプラスの魔と会つたこと

金糸雀がアリスゲームの第一の敗者となってしまったこと

今この場で言つたら翠羽の存在が真選組に割れてしまつた故

翠羽の機嫌をさらうに損ねてしまつた。心配させないためにも

皆には「自販機でジュース買つていたらきなり襲われて斬られた」と嘘の供述を述べた。

「大の警察がなんて不様な格好で屯所へ帰つてきたのですか！……斬られたあ？」

「心中は斬られず済んだ？」
心臓ぶち抜かれず済んだ？んな言つてる場合ですか！……
「鍛練は怠るなど、自分の身は自分で護れと昔母ちゃんと教えられなかつたですか！……」

「はいすみません。」

今は機嫌を損ねさせない為に言つことば聞いておいつと素直に謝る。

「まあ今回は右腕で済んだ…って右腕って貴方の利き腕じゃないですかっ！…どうすんですかこれからっ！食える物も食えないじゃないですか！！！」

ア、アせめて左腕
だつたらああ！！！」

翠羽は人一倍頑固者な反面人一倍優しい人形…いやここは人間と呼ぶべきなのだろうか？

「とにかくです！

今日の朝の巡回は翠羽一人で行くです！絶対動かないでくださいよ！動いたら…」

あの時から既に

「はいはいっ分かりましたっ！」

一回目の忠告

でもそれは

「分かってるわよー。気をつけたね

敵はもうすぐ側まで

近寄つてきてる つて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4957x/>

薔薇獄少女

2012年1月12日20時46分発行